

- | | |
|--------------------|--------------------|
| I 太田遺跡(第15次調査) | X 郡川遺跡(第14次調査) |
| II 太田遺跡(第16次調査) | XI 成法寺遺跡(第25次調査) |
| III 太田川遺跡(第2次調査) | XII 神宮寺遺跡(第2次調査) |
| IV 恩智遺跡(第28次調査) | XIII 東弓削遺跡(第19次調査) |
| V 恩智遺跡(第30次調査) | XIV 水越遺跡(第12次調査) |
| VI 恩智遺跡(第31次調査) | XV 水越遺跡(第13次調査) |
| VII 木の本遺跡(第25次調査) | XVI 水越遺跡(第14次調査) |
| VIII 久宝寺遺跡(第85次調査) | XVII 水越遺跡(第15次調査) |
| IX 久宝寺遺跡(第86次調査) | |

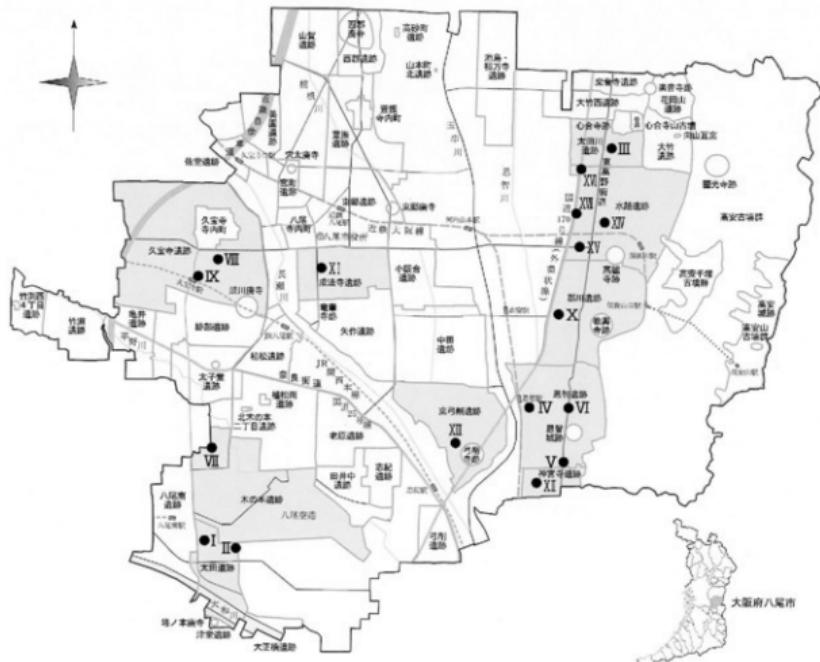
下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

2014年

公益財団法人八尾市文化財調査研究会

- | | |
|---------------------|---------------------|
| I 太田遺跡 (第15次調査) | X 郡川遺跡 (第14次調査) |
| II 太田遺跡 (第16次調査) | XI 成法寺遺跡 (第25次調査) |
| III 太田川遺跡 (第2次調査) | XII 神宮寺遺跡 (第2次調査) |
| IV 恩智遺跡 (第28次調査) | XIII 東弓削遺跡 (第19次調査) |
| V 恩智遺跡 (第30次調査) | XIV 水越遺跡 (第12次調査) |
| VI 恩智遺跡 (第31次調査) | XV 水越遺跡 (第13次調査) |
| VII 木の本遺跡 (第25次調査) | XVI 水越遺跡 (第14次調査) |
| VIII 久宝寺遺跡 (第85次調査) | XVII 水越遺跡 (第15次調査) |
| IX 久宝寺遺跡 (第86次調査) | |

下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調柘



2014年

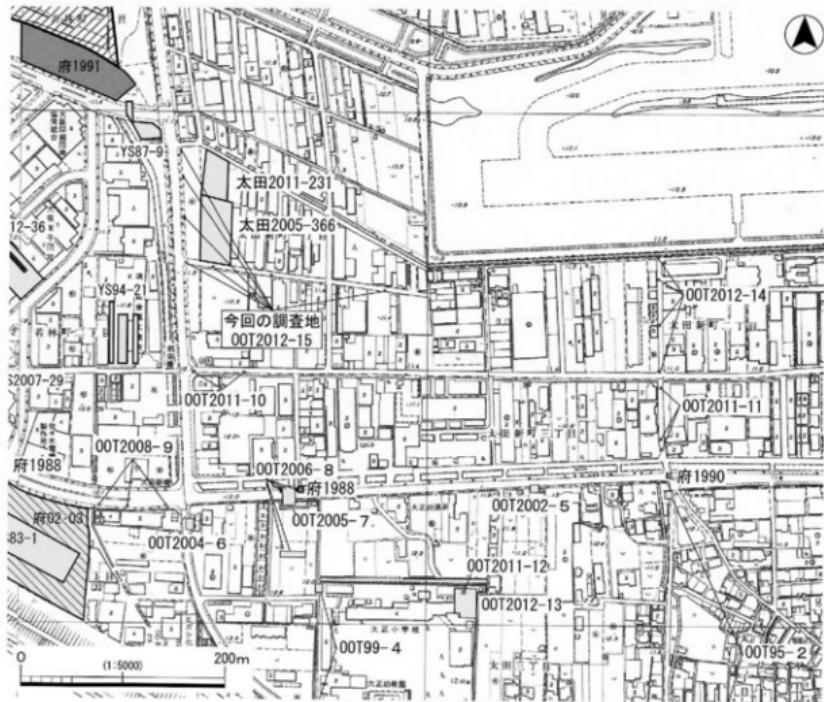
公益財団法人八尾市文化財調査研究会

I 太田遺跡第15次調査 (OOT2012-15)

1. はじめに

太田遺跡は八尾市南西部に位置する弥生時代～中世に至る複合遺跡である。現在の行政区画では、太田3・4・9丁目、太田新町1・3丁目がその範囲とされている。地理的には南から伸びる羽曳野丘陵の先端部と、北側に広がる旧大和川が形成した沖積地との接点部に位置する。周辺では、北側に木の本遺跡、西側に八尾南遺跡、東側に大正橋遺跡、南側には大和川を挟んで津堂遺跡が存在する。

今回の調査地は遺跡範囲の北西部に位置している。周辺での調査成果を概観すると、北部で実施した遺構確認調査(太田遺跡2005-366)において、古墳時代初頭の集落域を確認しており、土坑からは膨大な量の土器が出土している。また南部の第10次調査(OOT2011-10)、及び西側に隣接する八尾南遺跡域で実施した第21次調査(YS94-21)や遺構確認調査(八尾南遺跡95-248、2001-491)においても、弥生時代後期末～古墳時代初頭の集落域を確認している他、第10次調査では弥生時代前期の遺物包含層も検出している。



第1図 調査位置図

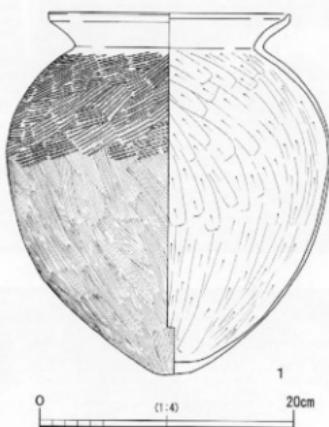
3) 検出遺構と出土遺物

S K 1

4区3層上面(T.P. + 10.25m)で検出した土坑である。南西角で検出したもので、西・南は調査区外に至るため詳細は不明である。検出部分の規模は南北約90cm・東西約30cm・深さ約30cmを測る。埋土はブロック状の3層からなり、中層は炭を多く含む。遺物は弥生時代後期頃と考えられる土器片が少量出土したが、図化しえるものはなかった。

7区6層出土遺物

庄内式壺(1)を図化した。1/2程度の残存で、口径19.0cm・器高28.2cm・体部最大径25.6cmを測る。径約2.8cmの平底を有し、調整は口縁部ヨコナデ、体部外面上位平行タタキ、下位ハケ、体部内面下から上のヘラケズリである。体部外面下半は煤ける。古墳時代初頭前半に比定される。



第5図 7区6層出土遺物

3. まとめ

今回の調査では、周辺での調査成果と同様に、弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構・遺物を検出した。出土遺物量はコンテナ1箱である。

西部では4区で弥生時代後期頃と考えられる遺構を検出した。南約110mで実施した第10次調査1区では、ほぼ同レベルで洪水砂により埋没した同時期の溝を検出しているが、この洪水砂は当地には及んでいないことが判明した。

東部では7区で古墳時代初頭の遺物包含層(6層)を検出した。ブロック状の層相であり、土圧で潰れた状況の庄内式壺が出土していることから、調査区全体を包括するような遺構埋土の可能性も考えられる。北部の太田遺跡2005-366で確認している該期の集落域の広がりが確認されたと言えよう。

参考文献

- ・原田昌則2007「1-1 太田遺跡(2005-366)の調査」『八尾市内遺跡平成18年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告55 平成18年度国庫補助事業』八尾市教育委員会
- ・坪田真一2012「I 太田遺跡第10次調査(OOT 2011-10)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告136』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・坪田真一1998「VI 八尾南遺跡第21次調査(Y S 94-21)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告61』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・吉田野乃1996「16 八尾南遺跡(95-248)の調査」『八尾市内遺跡平成7年度発掘調査報告書I』八尾市文化財調査報告33 平成7年度国庫補助事業』八尾市教育委員会
- ・坪田真一2003「32 八尾南遺跡(2001-491)の調査」『八尾市内遺跡平成14年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告48 平成14年度国庫補助事業』八尾市教育委員会



1区調査地(北から)



1区北壁



2区機械掘削(南から)



2区北壁



3区機械掘削(南から)



3区北壁



4区調査地(南から)



4区第1面(東から)



4区SK1(東から)



4区西壁



4区下部機械掘削(南から)



4区下部(南東から)



5区機械掘削(東から)



5区北壁



5区北壁下部



6区機械掘削(東から)

図版
3



6区南壁



6区南壁下部



7区機械掘削(東から)



7区東壁上部



7区東壁下部



7区東壁下部



7区東壁6層土器出土状況



7区6層出土遺物(1)

II 太田遺跡第16次調査 (OOT2013-16)

1. はじめに

太田遺跡は八尾市南西部に位置する弥生時代～中世に至る複合遺跡である。現在の行政区画では、太田3・4・9丁目、太田新町1・3丁目がその範囲とされている。地理的には南から伸びる羽曳野丘陵の先端部と、北側に広がる旧大和川が形成した沖積地との接点部に位置する。周辺では、北側に木の本遺跡、西側に八尾南遺跡、東側に大正橋遺跡、南側には大和川を挟んで津堂遺跡が存在する。

今回の調査地は遺跡範囲の北東部に位置している。周辺では東側で当研究会による第14次調査(OOT2012-14)、南側で第2次調査(OOT95-2)、第11次調査(OOT2011-11)、大阪府教育委員会による調査(府1990)が実施されている程度で、あまり発掘調査が行われていない地域といえる。概観すると、OOT2012-14で近世の井戸や耕作土、府1990では自然河川、OOT95-2では弥生時代末～古墳時代、OOT2011-11では弥生時代後期の遺構が検出されている。一方、西部では当調査研究会第4～10・15次調査を実施しており、第8次調査(OOT2006-8)では縄文時代～中世の遺構・遺物を検出した他、旧石器時代の地層から石器も出土している。



第1図 調査位置図

2. 調査概要

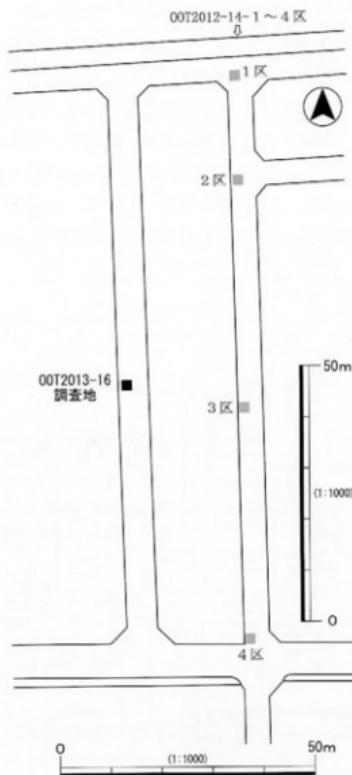
1) 調査の方法と経過

今回の調査は八尾市太田新町二丁目地内で実施した下水道工事(24-30工区)に伴う調査で、当調査研究会が太田遺跡内で行った第16次調査(OOT2013-16)である。

調査地は人孔部分1箇所(規模約2.0×2.0m)で、面積は約4m²である。

調査は現地表(T.P. +11.6m)下約2.7mまでについて、機械・人力掘削併用で実施した。

調査では工事図面記載のベンチマーク(KBM.2:T.P.+11.288)を標高の基準とした。



第2図 調査区位置図

図版
1



調査地(南から)



機械掘削(南から)



6層上面(北から)



西壁上部



下層機械掘削(南から)



西壁下部

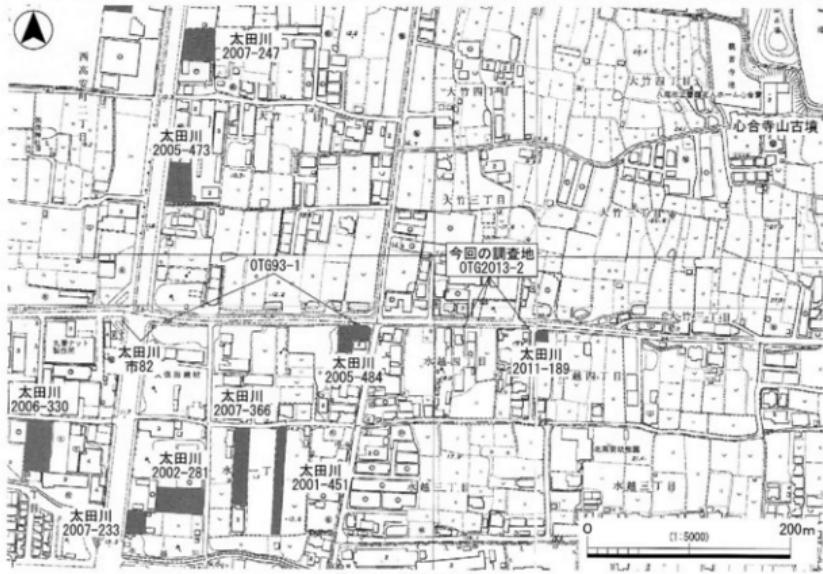
III 太田川遺跡第2次調査 (OTG2013-2)

1. はじめに

太田川遺跡は八尾市の北東部に位置し、現在の行政区画では大竹1・3・4丁目、水越1・3・4丁目、西高安町1・2丁目の、南北約500m・東西約850mがその範囲とされている。地理的には生駒山西麓の扇状地先端部にあたり、西流する太田川と水越川に挟まれた地域であり、同地形上において北側で大竹西遺跡、心合寺山古墳、心合寺跡、東側で大竹遺跡、南側で水越遺跡に接している。

当遺跡が認識されたのは、昭和15(1940)年3月、東高野街道改修工事の際、滑石製勾玉・弓筈状木製品等を含む地層が確認されたことによる。そして八尾市教育委員会により昭和56(1981)年に立会調査、さらに昭和57(1982)年には最初の発掘調査(太田川市82)が実施され、前者では古墳時代包含層、後者では弥生時代後期の遺構・遺物を検出した。その後も遺構確認調査や小規模な発掘調査が市教委・当調査研究会によって継続的に実施されており、当遺跡は弥生時代～中世の遺跡として認識されている。

今回の調査地である東西道路上の西方では、当調査研究会が第1次調査(OTG93-1)を実施しており、縄文時代晚期、弥生時代後期～古墳時代初頭、古墳時代後期、奈良時代に亘る遺構・遺物を検出している。なかでも古墳時代後期の溝から出土した滑石製有孔石製品の未完成品は、周辺の水越遺跡・大竹西遺跡といった玉造関連遺跡との関係を考える上で注目される資料である。



第1図 調査位置図

図版 1



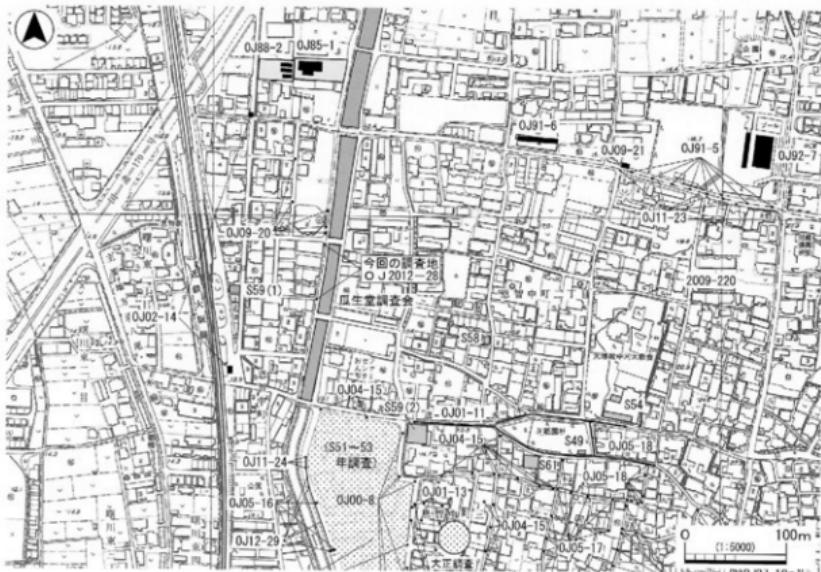
IV 恩智遺跡第28次調査（O J 2012-28）

1. はじめに

恩智遺跡は、八尾市南東部に位置する旧石器時代～鎌倉時代に至る複合遺跡である。現在の行政区画では、恩智北町1～4丁目、恩智中町1～5丁目、恩智南町1～5丁目にあたり、南北約1.0km、東西約1.2kmがその範囲とされる。地理的には生駒山地西麓に形成された扇状地から低地部にかけて広がっており、周辺では、北側に郡川遺跡、南側に神宮寺遺跡、西側に玉串川を挟んで東弓削遺跡が存在する。

本遺跡については、古くは大正6年(1917)の梅原末治・鳥田貞彦両氏による踏査と鳥居龍蔵氏による試掘調査、昭和14年(1939)の大坂府の事業に伴う藤岡謙二郎氏の発掘調査、昭和23年(1948)の今里幾次氏による出土遺物の報告等がある。そして昭和50～53年(1975～1978)には恩智川改修工事に伴う大規模な調査が瓜生堂遺跡調査会により行われ、以降、八尾市教育委員会・当調査研究会により多次にわたる調査が実施されている。これらの調査により当遺跡は縄文時代～弥生時代を中心とした遺跡として認識されており、恩智中町3丁目に位置する「天王の社」周辺から北西～西側を中心に展開していたことが判明している。

今回の調査地は遺跡範囲の西部にあたり、周辺では前述の恩智川改修に伴う調査の他、市教委S59(1)調査や、当研究会第20次調査を実施している。西部の市教委S59(1)調査では弥生時代中期～古墳時代の遺構・遺物が多く確認されており、弥生時代中期では土器棺墓が検出されている。



第1図 調査位置図
- 17 -

S P 5

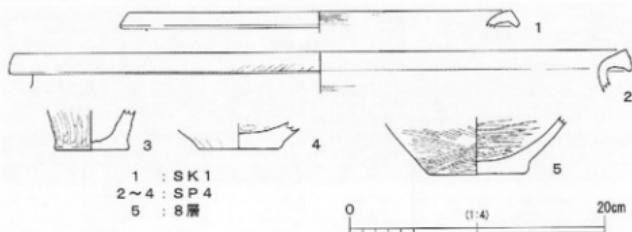
南部で検出したピットで、南は調査区外に至る。検出部分の平面形は円形に近く、規模は南北約30cm以上・東西約45cm・深さ約28cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土はブロック状の单層である。切り合い関係からみて他の遺構より古く位置付けられ、埋土も異なる。遺物は弥生時代中期頃の土器が出土した。

S P 6

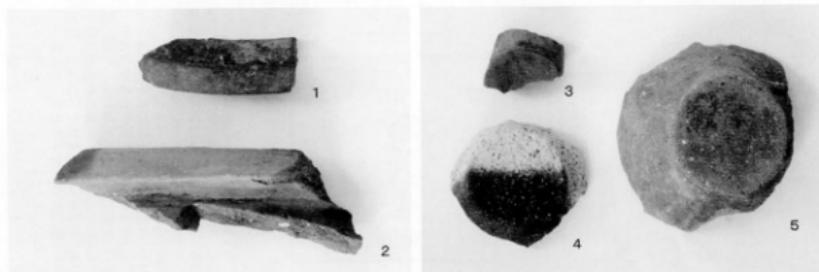
南部で検出したピットで、南は調査区外に至る。検出部分の平面形は方形に近く、規模は南北約26cm以上・東西約45cm・深さ約40cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土はS P 1と同じくブロック状の单層である。遺物は弥生時代中期の土器が出土した。

8層出土遺物

5を図化した。
壺底部で、調整
は内外面ともへ
ラミガキを施す。
弥生時代前期に
通る可能性があ
る。



第4図 出土遺物



3.まとめ

1区では、周辺の調査地と同様に弥生時代中期の遺構が密に検出され、調査地は該期の集落域の中心に含まれていると言えよう。弥生時代前期の土器も認められることから、遺構は検出されなかったものの、集落の時期は前期まで通る可能性がある。2区では相当する地層が認められなかつたが、後世の河川により削平されているものと考えられる。

参考文献

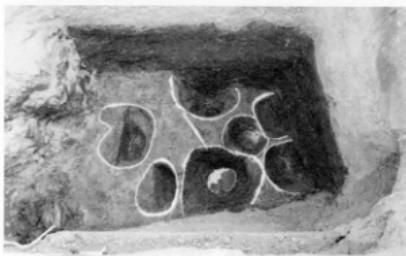
- ・田代克己・他1980「恩智遺跡」瓜生堂遺跡調査会
- ・米田敏幸1985「2. 恩智遺跡の調査（恩智中町1丁目77-2）」「八尾市内遺跡昭和59年度発掘調査報告書 八尾市文化財調査報告11 昭和59年度国庫補助事業」八尾市教育委員会
- ・坪田真一2011「I 恩智遺跡第20次調査(OJ 2009-20)」「財團法人八尾市文化財調査研究会報告132」財團法人八尾市文化財調査研究会



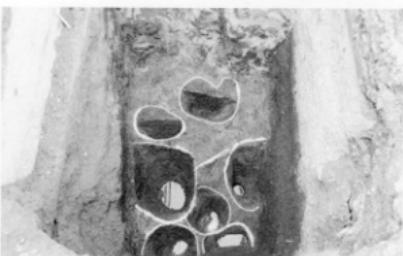
調査地(北から)



1区機械掘削(北から)



1区全景(西から)



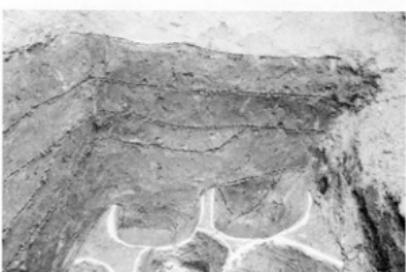
1区全景(南から)



1区東壁



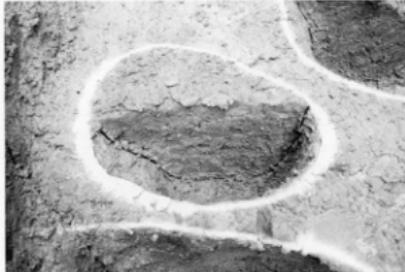
1区東壁



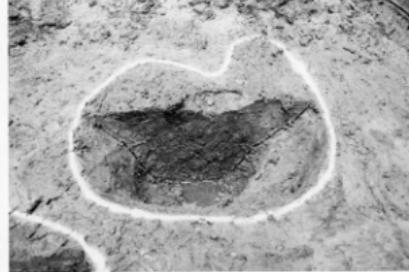
1区南壁



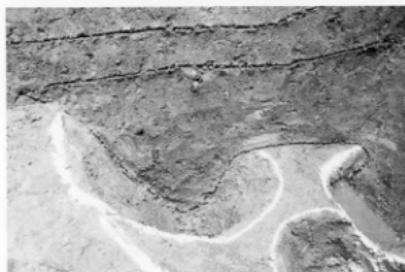
1区SK 1(西から)



1区SP1(南から)



1区SP2(南から)



1区SP3(西から)



1区SP4底部盤板(北から)



1区SP5(北から)



1区SP6(北から)



2区東壁



2区東壁下部

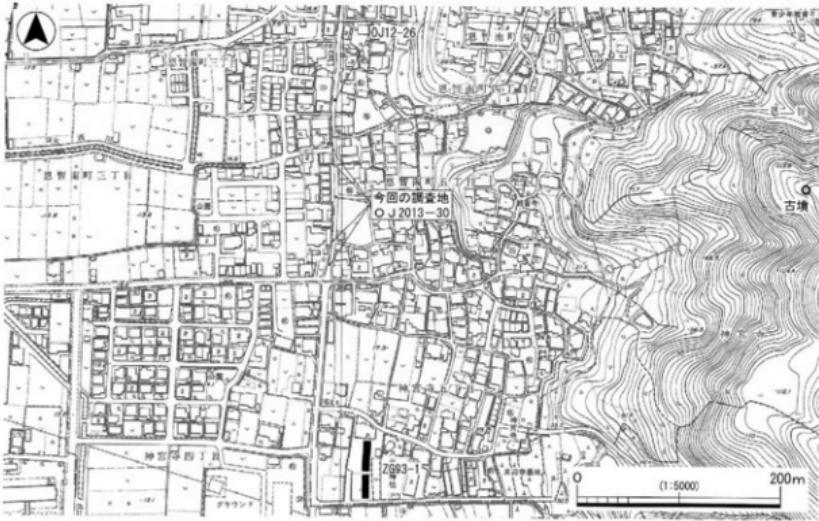
V 恩智遺跡第30次調査 (OJ 2013-30)

1. はじめに

恩智遺跡は、八尾市南東部に位置する旧石器時代～鎌倉時代に至る複合遺跡である。現在の行政区画では、恩智北町1～4丁目、恩智中町1～5丁目、恩智南町1～5丁目にあたり、南北約1.0km、東西約1.2kmがその範囲とされる。地理的には生駒山地西麓に形成された扇状地から低地部にかけて広がっており、周辺では、北側に郡川遺跡、南側に神宮寺遺跡、西側に玉串川を挟んで東弓削遺跡が存在する。

本遺跡については、古くは大正6(1917)年の梅原末治・鳥田貞彦両氏による踏査と鳥居龍蔵氏による試掘調査、昭和14(1939)年の大阪府の事業に伴う藤岡謙二郎氏の発掘調査、昭和23年(1948)の今里幾次氏による出土遺物の報告等がある。そして昭和50～53年(1975～1978)には恩智川改修工事に伴う大規模な調査が瓜生堂遺跡調査会により行われ、以降、八尾市教育委員会・当調査研究会により多次にわたる調査が実施されている。これらの調査により当遺跡は縄文時代～弥生時代を中心とした遺跡として認識されており、恩智中町3丁目に位置する「天王の社」周辺から北西～西側を中心に展開していたことが判明している。

今回の調査地は遺跡範囲の南端部にあたる。周辺では北部で第26次調査(OJ12-26)を実施している程度で、あまり発掘調査は行われていない地域である。(OJ12-26)では岩盤層や河川堆積を確認している。なお南約200mで実施した神宮寺遺跡第1次調査(ZG93-1)では、弥生時代中期～室町時代の遺構・遺物が多く検出されており、弥生時代中期の土器棺墓からなる墓域の確認や、室町時代の石組井戸は特筆される。



第1図 調査地位置図

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の調査は八尾市恩智南町5丁目地内で実施された下水道工事(24-21工区)に伴う調査で、当調査研究会が恩智遺跡内で行った第30次調査(OJ 2013-30)である。

調査区は八尾市東部を縦断する旧国道170号(東高野街道)上に設定された5箇所(北から1~5区)で、内訳は立坑部分(5区)・人孔部分(3区)・小型マンホール部分(1・2・4区)、調査面積は約20m²である。

調査は工事掘削深度である現地表(約T.P. +16.2~17.7m)下2.0~3.2mまで機械・人力掘削併用で実施した。

調査では、調査地に点在する工事使用の仮ベンチマークを標高の基準とした。



第2図 調査区位置図

2) 基本層序と出土遺物

1区

0層は盛土・搅乱。1・2層は一連の水成層で、河川堆積と考えられる。18世紀頃の堺摺鉢片が出土した。

2区

0層は盛土・搅乱。1~3層は一連の水成層で、河川堆積~土石流堆積と考えられる。遺物は2層から14世紀後半頃の瓦器鉢(1)の他、平瓦片が出土した。

1は片口を有する鉢で、調整は外面ヘラケズリ、内面ヨコハケ・ハケである。

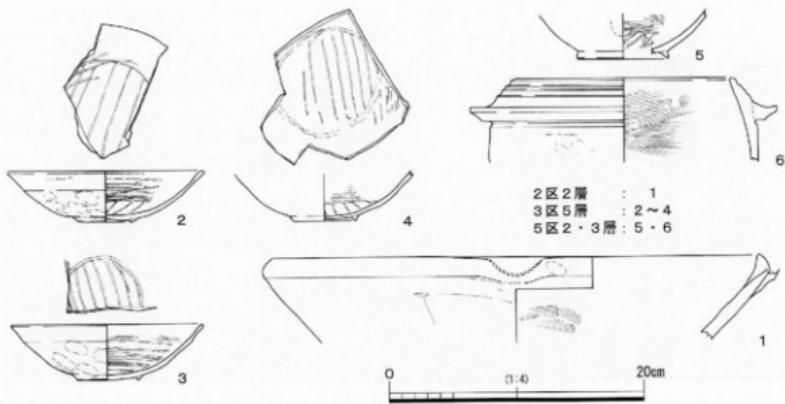
3区

0層は盛土・搅乱。1層は土壤化層で、作土の可能性がある。2層以下は一連の水成層と考えられ、河川堆積と考えられる。遺物は2層から16世紀末頃の備前焼摺鉢片、4層から中世の土師器羽釜片、5世紀末頃の須恵器高杯片、5層から12世紀末~13世紀初頭頃に比定される瓦器碗、16世紀末頃の土師器、須恵器、瓦器羽釜、陶器片が出土した。

5層出土の瓦器碗(2~4)を図化した。いずれも体部のヘラミガキは内面のみで、見込みの暗文は平行線状である。これらは13世紀初頭頃に比定される

4区

0層は盛土・搅乱。1~3層は一連の水成層で、河川堆積~土石流堆積と考えられる。遺物は1層から平瓦片、2層から土師器・須恵器・瓦器片が出土した



第4図 出土遺物

5区

0層は盛土・搅乱。1層は土壤化層で、作土の可能性がある。2・3層は一連の水成層で、河川堆積と考えられる。2・3層からは12世紀後半～16世紀前半頃の土師器、須恵器、瓦器、瓦の他、弥生時代後期の土器片が出土しているが、いずれも著しく摩耗している。5・6を図化した。5は瓦器椀で、体部内面のヘラミガキは密で、見込みの暗文は乱方向に施す。12世紀中頃に比定される。6は瓦器羽釜である。内面調査はヨコハケで、体部外面はヘラケズリである。15世紀末頃に比定される。

3) 検出遺構と出土遺物

3区2層上面(T.P. + 16.0m)で溝1条(S D 1)を検出した。

S D 1

東西方向に延びる溝で、規模は検出長約1.2m・幅約0.6m・深さ約0.3mを測る。断面逆台形を呈し、埋土は水成層と考えられる単層である。遺物は中世頃の土師器、瓦器椀片が出土した。

3.まとめ

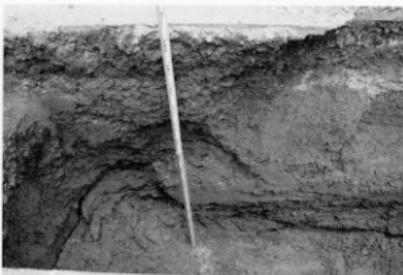
調査では北の第26次調査地と同様に、全域で河川堆積や土石流堆積からなる水成層を確認した。時期は出土遺物から中世～近世に比定される。3区では12世紀末～13世紀初頭頃に比定される瓦器椀が出土しているが、遺存状態は良好であり、近辺に該期の集落域の存在が考えられる。

参考文献

- ・田代克己・他1980『恩智遺跡』瓜生堂遺跡調査会
- ・高萩千秋2013^Ⅲ『恩智遺跡第26次調査(O J 2012-26)・郡川遺跡第13次調査(K R 2012-13)』『公益財団法人八尾市文化財調査研究会報告141』公益財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・岡田清一1997^Ⅲ『神宮寺遺跡第1次調査(Z G 93-1)』『財團法人八尾市文化財調査研究会報告57』財團法人八尾市文化財調査研究会



1区機械掘削(南西から)



1区東壁



2区機械掘削(南東から)



2区西壁



3区遠景(南東から)



3区2層上面(北から)



3区南壁

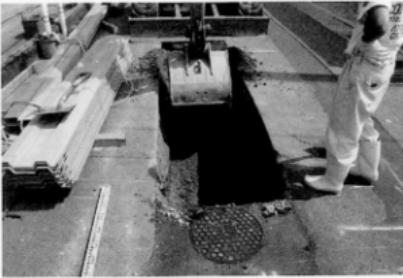


3区南壁下部

図版
2



3区南壁5層内土器出土状況



4区機械掘削(南から)



4区西壁



4区東壁



4区(南から)



5区調査地(南から)



5区南壁



5区南壁下部



1



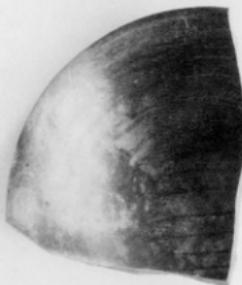
6



—



2



—



3



—



4

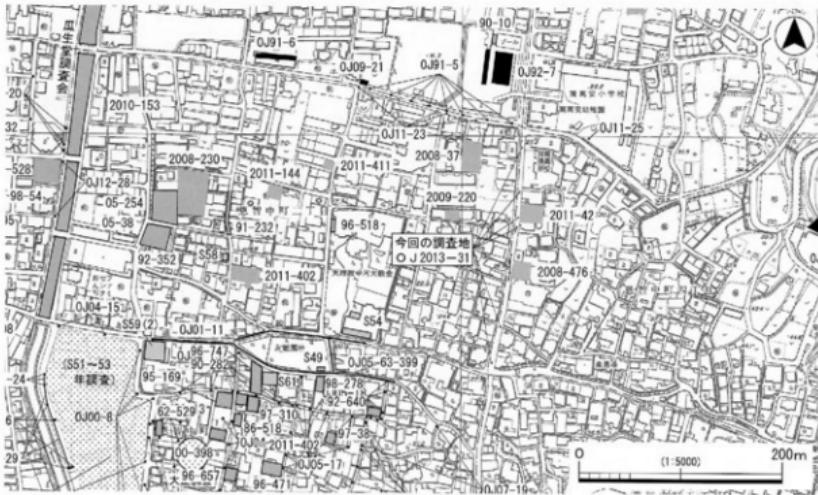
VI 恩智遺跡第31次調査 (O J 2013-31)

1. はじめに

恩智遺跡は、八尾市南東部に位置する旧石器時代～鎌倉時代に至る複合遺跡である。現在の行政区画では、恩智北町1～4丁目、恩智中町1～5丁目、恩智南町1～5丁目にあたり、南北約1.0km、東西約1.2kmがその範囲とされる。地理的には生駒山地西麓に形成された扇状地から低地部にかけて広がっており、周辺では、北側に郡川遺跡、南側に神宮寺遺跡、西側に玉串川を挟んで東弓削遺跡が存在する。

本遺跡については、古くは大正6(1917)年の梅原末治・鳥田貞彦両氏による踏査と鳥居龍藏氏による試掘調査、昭和14(1939)年の大阪府の事業に伴う藤岡謙二郎氏の発掘調査、昭和23年(1948)の今里幾次氏による出土遺物の報告等がある。そして昭和50～53年(1975～1978)には恩智川改修工事に伴う大規模な調査が瓜生堂遺跡調査会により行われ、以降、八尾市教育委員会・当調査研究会により多次にわたる調査が実施されている。これらの調査により当遺跡は縄文時代～弥生時代を中心とした遺跡として認識されており、恩智中町3丁目に位置する「天王の杜」周辺から北西～西側を中心に展開していたことが判明している。

今回の調査地は遺跡範囲の中央部を縱断する旧国道170号(東高野街道)上にあたる。周辺では北西部で第5・7・23次調査(OJ91-5、OJ92-7、OJ2011-23)の他、遺構確認調査では旧国道沿いで恩智2008-476、2011-42、西部で恩智2008-37、2009-220を実施している。概観すると、OJ91-5東部では古墳時代中期の溝、OJ92-7では縄文時代後期～弥生時代中期頃と、13世紀頃の遺構・遺物、OJ2011-23東部、恩智2008-476では平安時代末頃の遺構、恩智2009-220では縄文時代後期～晩期の遺物包含層を検出している。



第1図 調査位置図

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の調査は八尾市恩智中町4丁目地内他で実施された下水道工事(24-43工区)に伴う調査で、当調査研究会が恩智遺跡内で行った第31次調査(OJ 2013-31)である。

調査区は、旧国道170号(東高野街道)上に設定された人孔部分7箇所・管路部分5箇所の計12箇所(北から1~12区)で、調査面積は計約57m²である。内訳は、人孔部分-1・3・4・7・9・11・12区、管路部分-2・5・6・8・10区となる。

調査は工事掘削深度である現地表(約T.P. +20.6~27.2m)下2.2~3.0mまで機械・人力掘削併用で実施した。

調査では、調査地に点在する工事使用的仮ベンチマークを標高の基準とした。

2) 基本層序

調査地は生駒山地西麓の扇状地にあたり、しかも南北約200mに亘って調査区が点在している。そのため類似する層相であっても同一の地層と断定するのは困難と考えられるが、ここでは層相と出土遺物から大まかに基本層序を設定した。

調査地は北から南に向かって上がる道路で、現地表面の標高は1区がT.P. +20.6m、11区が27.2mで、標高差約6.6mを測る。

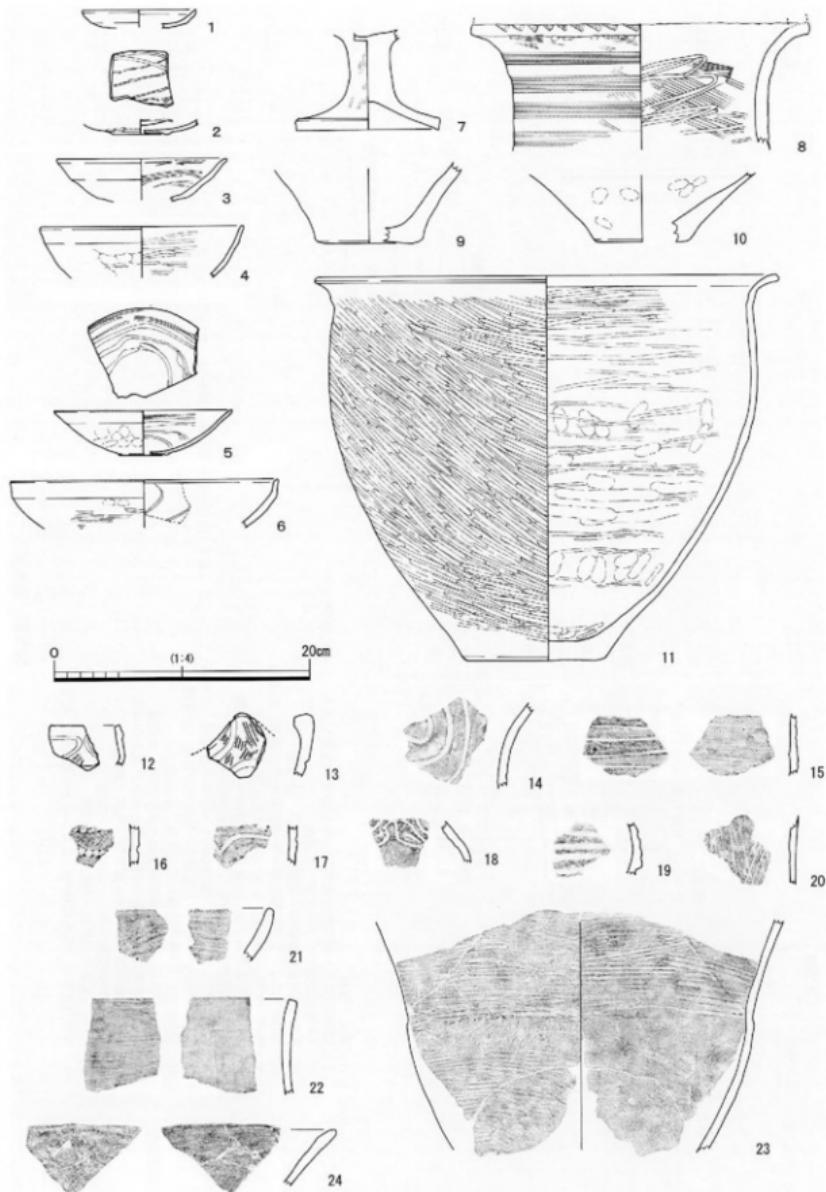
0層は盛土・擾乱。1層(1A・1B層)は1・2区で見られた土壤化層で、作土の可能性もある。時期は中世以降である。2層(2A~2E層)は1~7区で見られた水成層である。2C層では3区から中世頃の土師器、丸瓦片が、6区から奈良時代の土師器が出土した。3層は1・2区で見られた水成層で、径1mまでの巨礫を含む土石流堆積である。2区では最上部から13世紀前半頃までの土師器、瓦器が出土した。4層(4A~4C層)は11区で見られた水成層である。4C層から須恵器片1点が出土した。5層(5A・5B層)は5~9区で見られ、水成層と考えられる。縄文時代後期~弥生時代中期の土器を含んでいる。下位の6層は土壤化層で、弥生時代中期頃の生活面に相当すると考えられる。7層は3~5層で見られた水成層である。4区では上面で遺構状の落ち(ア層)を西壁で確認した。8層は8・9区で見られた水成層である。9層は6~10区で見られた水成層で、径1mを超えるような巨礫を含む土石流堆積である。

3) 検出遺構と出土遺物

4区西壁で、7層上面(T.P. +21.7m)から切り込む遺構状の落ち(ア層)を確認した。検出部分で深さ約30cmを測る。ア層はブロック状の層相で炭を多く含む。遺物は弥生時代中期頃に比定される土器片が出土したが、図化しえるものはなかった。



第2図 調査区位置図



第4図 出土遺物



1区調査地(北から)



1区機械掘削(東から)



1区北壁



2区機械掘削(北西から)



2区(北から)



2区西壁



3区調査地(南から)



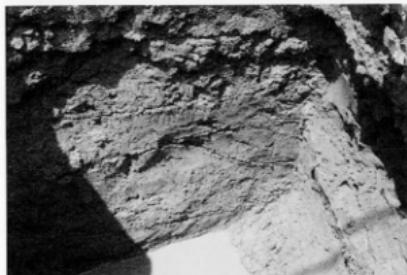
3区南壁



4区調査地(北から)



4区西壁



4区西壁ア層



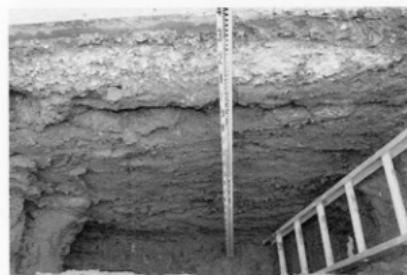
5区西壁北部



5区西壁南部



6区機械掘削(北から)



6区西壁北部



6区西壁南部



7区北西壁



7区北西壁58層内土器



8区全景(北から)



8区西壁



9区調査地(南西から)



9区西壁



9区西壁58層内土器



9区北壁58層内土器

図版4



10区機械掘削(北から)



10区全景(北から)



10区西壁中部



11区機械掘削(南西から)



11区西壁



12区調査地(南から)



12区機械掘削(南東から)



12区西壁



5



7



8



11



12



13

図版
6



14



15



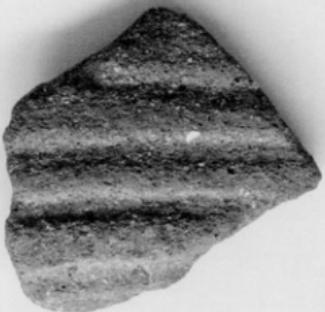
16



17



18



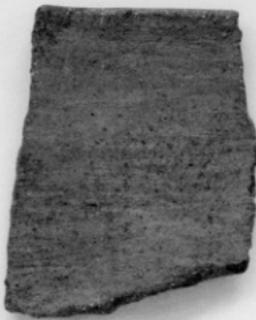
19



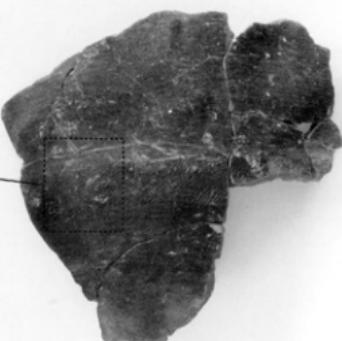
20



24



22



23

VII 木の本遺跡第25次調査 (SK2013-25)

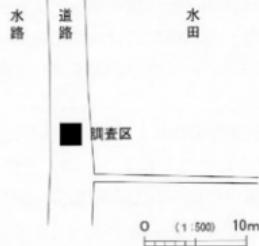
1. はじめに

木の本遺跡は八尾市の南部に位置し、現在の行政区画では木の本1~3丁目、南木の本2~9丁目、空港1丁目がその範囲とされている。地形的には河内平野の南西部、旧大和川水系の平野川左岸の沖積地上に位置し、東に田井中遺跡・老原遺跡、西~南側には八尾南遺跡・太田遺跡が隣接する他、北側には太子堂遺跡・植松遺跡・植松南遺跡といった平野川流域に展開する遺跡が存在する。

当遺跡発見の契機は、昭和56年度に八尾市教育委員会が南木の本4丁目で実施した試掘調査で、弥生時代中期前半~古墳時代後期の遺物包含層が確認されたことによる。続く発掘調査(市80~81)では弥生時代中期前半、古墳時代前期・中期の遺構が検出された。昭和57・58(1982・1983)年度には、八尾空港内の整備事業に伴い、当調査研究会が第1次調査を実施し、平安時代の条里水田の広がりを確認した。その後も河川改修や、下水道工事等に伴う調査が大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会により実施され、弥生時代前期以降の遺跡であることが確認されている。



第1図 調査地周辺図



第2図 調査区位置図



第3図 断面図

今回の調査地は遺跡範囲西端にあたる。南東部では大阪府教育委員会により平野川改修工事に伴う調査(府1998~2000)が実施されており、古墳時代初頭~近世の集落遺構が確認されている。また南部の第3次調査(S K83-3)では古墳時代前期~中期の掘立柱建物・遺物包含層を検出している他、北東部に近接する第16次調査(S K2009-16)で出土した弥生時代後期~古墳時代前期の銅鏡は、遺存状況が良好な資料で特筆される。

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の調査は八尾市南木の本3丁目地内で実施した下水道工事(24-41工区)に伴う調査で、当調査研究会が木の本遺跡内で行った第25次調査(S K2013-25)である。

調査地は人孔部分1箇所(約 $2.0 \times 2.0\text{m}$)で、総面積は約 4.0m^2 を測る。調査は現地表(T.P. + 10.3m)下2.2mまでの地層について、機械および人力により掘削を行い実施した。調査では工事使用のベンチマーク(KBM.3 : T.P. + 10.234m)を標高の基準とした。

2) 基本層序

No.4人孔を現地表下約2.2mまで調査した。現地表面の標高はT.P. + 10.3mである。0~4層の堆積層を確認した。0層は盛土。1~4層は湿地性堆積層である。

3) 検出遺構と出土遺物

遺構の検出および遺物の出土はなかった。



調査地周辺(北東から)



機械掘削状況(北から)



4層上面全景(西から)



東壁0~4層(西から)

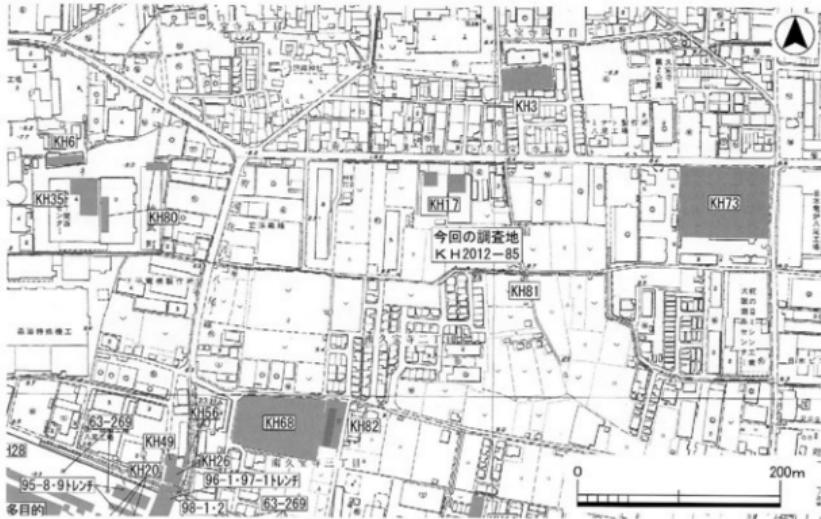
VIII 久宝寺遺跡第85次調査 (KH2012-85)

1. はじめに

久宝寺遺跡は八尾市の西端に位置し、現在の行政区画によると、八尾市内では北久宝寺1~3、久宝寺1~6、西久宝寺、南久宝寺1~3、神武町、北龜井町1~3、龍華町1・2、渋川町1~7がその範囲となっており、さらに西の大阪市域・北の東大阪市域に広がっている。地理的には旧大和川の主流である長瀬川の左岸にあたり、同地形上で南側に跡部遺跡・龜井遺跡・太子堂遺跡が存在する。

当遺跡発見の契機は、昭和10年に八尾市久宝寺5丁目で行われた道路工事の際に、弥生土器・土師器・丸木船の残片が出土したことによる。昭和48年度には、大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センターによる近畿自動車道天理~吹田線関連の総延長13.5kmに及ぶ発掘調査が開始され、以降、大阪府文化財センター・東大阪市文化財協会・八尾市教育委員会・当調査研究会において多次にわたる発掘調査が実施されている。これらの調査成果から、当遺跡は縄文時代晩期~近世にわたる遺跡であることが確認されている。

今回の調査地は遺跡範囲中心部のやや南東にあたり、北側には中世末以降に久宝寺御坊顯證寺を中心として発展する久宝寺寺内町が位置している。調査地周辺では当調査研究会が第3・17・73・81次調査(KH3・17・73・81)を実施しており、KH17では弥生時代後期末~古墳時代前期、平安時代後期、KH3・81では古墳時代前期、KH17では奈良時代~中世を中心とした遺構が検出されている。なかでもKH17出土の古墳時代前期の多量の木製品(紡織具・農具等)や、KH3検出の古墳時代前期の方形周溝墓、KH81検出の近世用水施設は特筆される。



2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の調査は八尾市南久宝寺1丁目地内他で実施した下水道工事(24-26工区)に伴う調査で、当調査研究会が久宝寺遺跡内で行った第85次調査(K H 2012-85)である。

調査地は人孔部分(約2.0×2.0m)3箇所(西から1~3区)で、総面積は約12m²を測る。

調査は工事掘削深度である現地表(約T.P. +8.5~8.8m)下約3.0mまでについて、機械・人力掘削併用で実施した。

調査においては、工事設計図記載のベンチマーク(KBM. 1:T.P. +8.800m)を標高の基準とした。

2) 基本層序

0層は盛土・擾乱、及び現況の東西水路堆積土である。1層は3区で見られた搅拌された作土である。時期は近世であろう。2・3層は3区で見られた土壤化層で、作土の可能性もある。中世の土師器・瓦器が出土した。4層は1区で見られた水成層で、河川堆積層である。5層は3区で見られた水成層で、河川堆積層である。東に約20mの地点で実施した第81次調査では、約T.P. +6.6mまで及んでいたが、当地ではT.P. +5.8m以下に及んでおり、より河川の流心に近いと捉えられる。6層以下は1・2区で見られた。6~9層の粘土層は炭酸鉄やラミナ状の植物遺体を含む層相で、湿地性の水成層である。10層は暗色を呈する土壤化層である。2区では古式土師器と考えられる土器片が出土した。11層は水成層で、河川堆積層であろう。

3) 検出遺構と出土遺物

2区11層上面(約T.P. +5.9m)でピット1個(S P 1)を検出した。

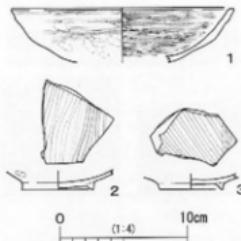
S P 1

平面形は南北主軸の楕円形を呈し、規模は南北約35cm・東西約22cm・深さ約10cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土はブロック状の単層である。遺物は出土していない。

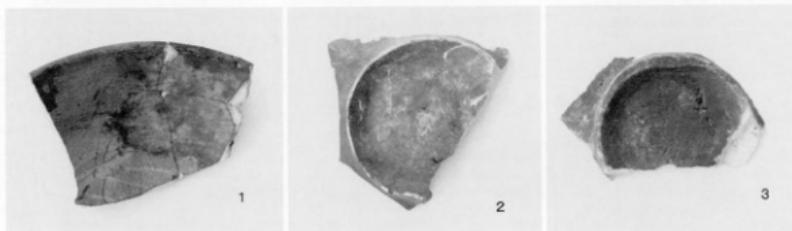
3区2・3層出土遺物

瓦器3点(1~3)を図化した。

1は口縁部~体部、2・3は底部である。いずれも内面のヘラミガキが比較的密に施されるもので、時期的には12世紀中頃に比定されよう。



第4図 出土遺物



図版1



調査地(北東から)



1区西壁上部



1区西壁下部



2区全景(北から)



2区SP1(北から)



2区北壁



3区機械掘削(西から)



3区東壁

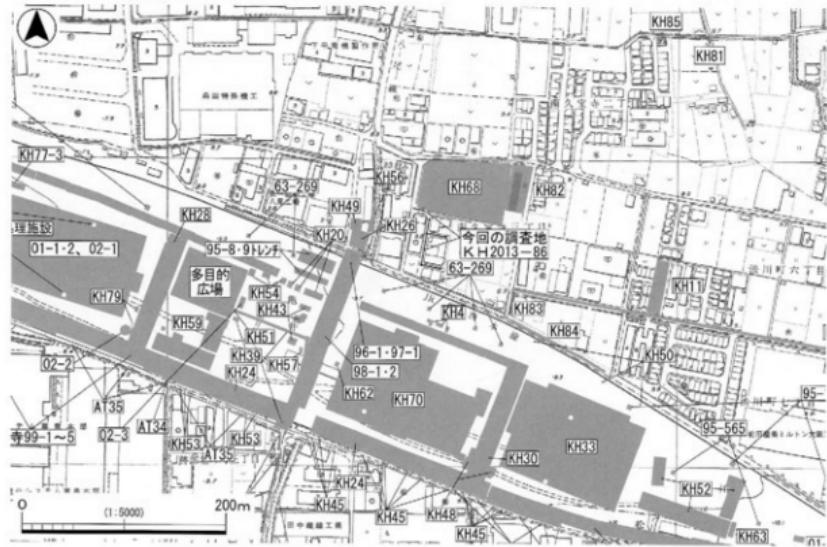
IX 久宝寺遺跡第86次調査 (K H2013-86)

1. はじめに

久宝寺遺跡は、古大和川の主流であった古長瀬川左岸の低位冲積地に位置する縄文時代晩期～近世の複合遺跡である。八尾市の北西部に位置し、現在の行政区画では八尾市久宝寺1～6、北久宝寺1～3、西久宝寺、南久宝寺1～3、神武町、北龜井1～3、龍華町1・2、渋川町1～7、及び東大阪市大蓮東5、大蓮南2一帯の東西1.8km・南北1.7kmがその範囲にある。当遺跡の周辺には、北東に佐堂遺跡、東に宮町遺跡・八尾寺内町遺跡・成法寺遺跡、南に龜井遺跡・跡部遺跡、西に加美遺跡(大阪市)が隣接している。

当遺跡は、昭和10年に八尾市久宝寺5丁目で実施された道路工事中に、弥生土器や土師器・須恵器、そして丸木舟の残片が出土したことが発見の契機となった。その後、昭和55~61年に(財)大阪文化財センター(現、財団法人大阪府文化財センター。以下府センター)によって実施された近畿自動車道建設に伴う発掘調査により、縄文時代晩期~近世の複合遺跡であることが判明した。また遺跡範囲の南部を占める旧国鉄竜華操車場跡地の再開発にあたっては、昭和63年以降、府センター、八尾市教育委員会、当調査研究会によって継続的に調査が実施されており、府センターによる水処理施設調査地では古墳時代初頭~前期の墳墓が60基以上検出されており特筆される。

今回の調査地は遺跡範囲の南部、旧国鉄竜華操車場北側に位置する。周辺では北東部で当調査研究会による第68・82次調査、西部で第26・49・56次調査等があり、古墳時代中期～後期を中心とする多大な調査成果を得ている。



第1図 調査地位置図

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の調査は八尾市南久宝寺3丁目地内で実施された下水道工事(24-206工区)に伴う調査で、当調査研究会が久宝寺遺跡内で行った第86次調査(K H 2013-86)である。

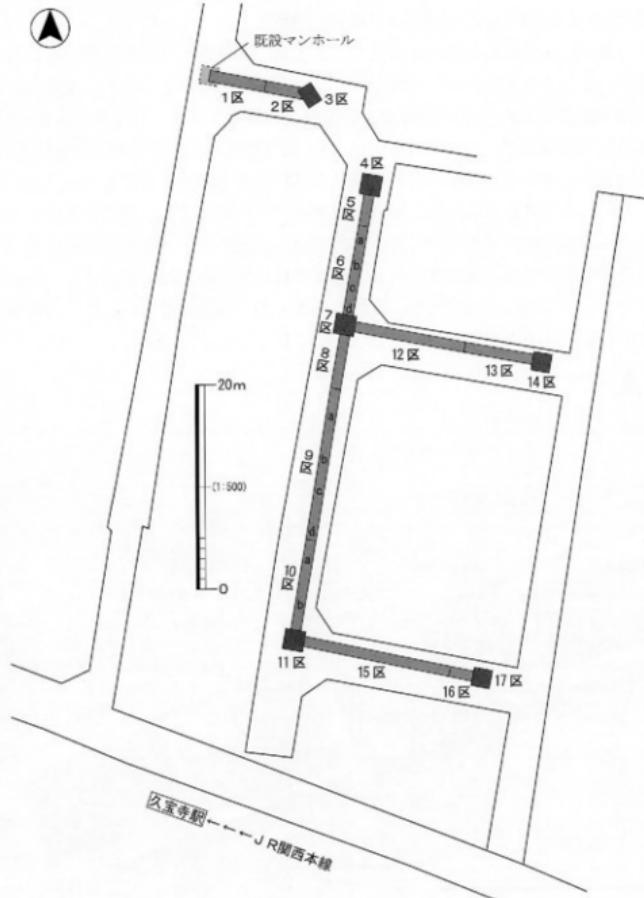
調査区は立坑部分1箇所(約 1.5×2.0 m)、人孔部分5箇所(約 2.0×2.0 m)、及び管路部分約76.0m(幅約0.8~1.0m)で、調査面積は約99m²である。調査は工事の進捗状況に合わせて実施し、地区名は北から1~17区とした。調査区の内訳は立坑・人孔部分が3・4・7・11・14・17区、他の地区が管路部分となる。なお3~11区については夜間調査である。

調査は工事掘削

深度である現地表
(約T.P. + 8.6~
8.7m)下1.5~3.1
mまで機械・人力
掘削併用で実施し
た。

なお管路部分の
内、夜間調査とな
った5・6・8~
10区の地層につい
ては、工事の進捗
状況に合わせて任
意の地点において
断面図を作製した
(小文字アルファ
ベット地点)。

調査では、調査
地内に所在する工
事使用的仮ベンチ
マーク(KBM.5:T.P.
+8.644m)を標高
の基準とした。また
夜間調査範囲に
ついては設計図記
載の地盤高値を使
用した。



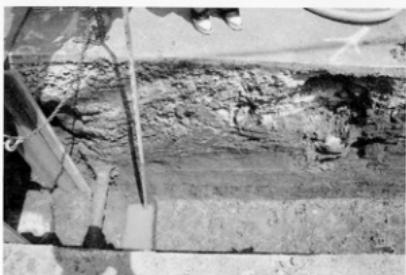
第2図 調査区位置図



調査地(南から)



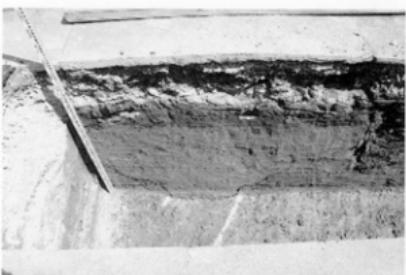
1区全景(南西から)



1区北壁



2区SD1(東から)



2区北壁



3区機械掘削(北西から)



3区北壁



3区北壁下部



4区西壁



4区西壁下部



5区西壁



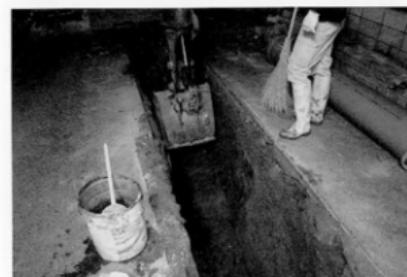
6区b東壁



7区西壁



8区東壁



9区機械掘削(北から)



9区a東壁



9区c 東壁



10区a 西壁



11区南壁



12区機械掘削(東から)



12区北壁西半



12区北壁東半



13区調査状況(西から)



13区北壁



14区全景(東から)



14区北壁



15区全景(東から)



15区北壁



16区全景(西から)



16区北壁



17区北壁



17区北壁

X 郡川遺跡第14次調査 (KR2013-14)

1. はじめに

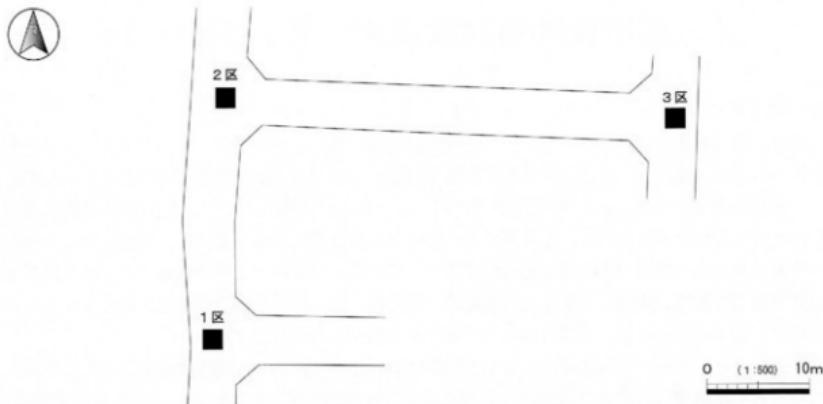
郡川遺跡は八尾市の東部に位置し、現在の行政区画の郡川1～5丁目・教興寺1～7丁目・黒谷1～5丁目・垣内1～5丁目にあたる東西約1.1km・南北約1.2kmの範囲が遺跡範囲とされている。生駒山西麓から西に広がる河内平野に続く扇状地上に立地しており、地形的には西半部がT.P.+11～30mを測る緩斜面、東半部が30～70mを測る急斜面となっている。西側には旧大和川の主流であった玉串川・恩智川の氾濫原が広がっている。当遺跡は北側で水越遺跡、南側で恩智遺跡と接しており、東側の生駒山地西麓地域一帯には、古墳時代後期の群集墳を中心とする高安古墳群が広がっている他、東部には古代寺院である教興寺跡が存在する。

当遺跡では以前から、縄文時代後期とされる磨製石斧や、弥生・古墳時代の土器が採集されており、北の水越遺跡、南の恩智遺跡と同様の遺跡の存在が想定されていた。最初の発掘調査は、昭和63年に実施された八尾市教育委員会による遺構確認調査であり、古墳時代中期～後期の集落が確認された。その後、八尾市教育委員会・当調査研究会により多次にわたる発掘調査が行われており、当遺跡は南方の生駒山地西麓に位置する恩智遺跡と同様、縄文時代には扇状地末端部に集落が形成され、以降連続と続く集落遺跡であると認識されている。

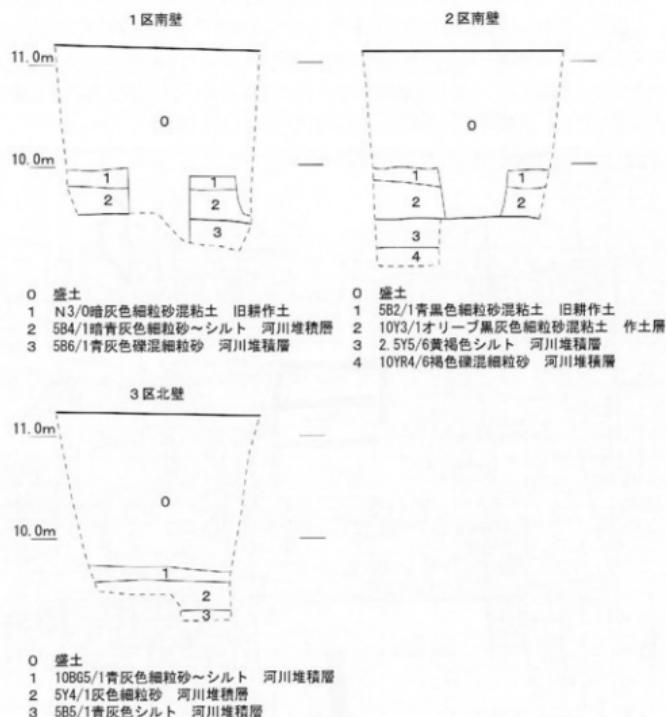
今回の調査地北東側では、平成2(1990)年度に区画整理事業に伴う第2次調査を実施しており、弥生時代前期～中期、古墳時代、室町時代の遺構を検出している。



第1図 調査地周辺図



第2図 調査区位置図



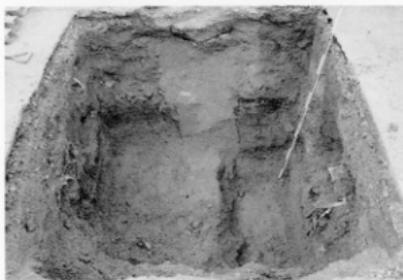
第3図 1～3区断面図 S = 1/50



1・2区調査地周辺(北から)



3区調査地周辺(西から)



1区3層上面全景(北から)



1区南壁0～3層(北から)



2区3層上面全景(北から)



2区南壁0～4層(北から)



3区2層上面全景(南から)



3区北壁0～3層(南から)

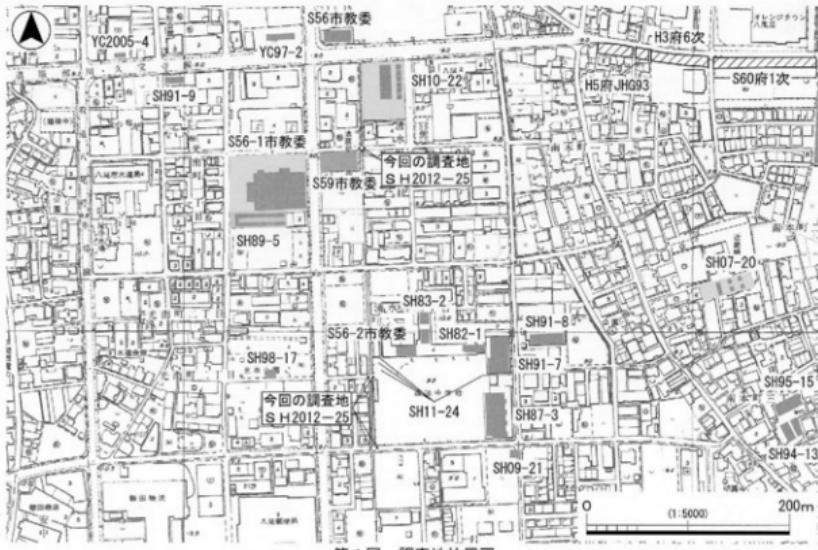
XI 成法寺遺跡第25次調査 (S H2012-25)

1. はじめに

成法寺遺跡は八尾市のほぼ中央部に位置し、現在の行政区画では光南町1・2丁目、清水町1・2丁目、南本町1~4丁目、高美町1・2丁目、松山町1丁目、明美町1丁目、陽光園1丁目がその範囲とされ、東西約1.1km・南北約0.6kmに広がっている。地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた冲積地上に立地している。周辺では北側で東郷遺跡・八尾寺内町、東側で小阪合遺跡、南側で矢作遺跡・龍華寺跡に隣接し、西側には長瀬川が北流している。

当遺跡は昭和56年5月、八尾市教育委員会が光南町1丁目29番で実施した試掘調査により確認された遺跡で、以降大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会により多次にわたる発掘調査が行われている。これらの調査成果から、当遺跡は弥生時代中期からの遺跡であることが知られている。

今回の調査地周辺では、北部で市教委によるS56-1、S59、当研究会による第5・22次調査等が実施されており、S56-1、S59、第5次調査では、弥生時代後期・古墳時代後期の集落遺構、古墳時代前期～中期の墓域等が検出されている。また南部の市立成法中学校敷地内においては、校舎改築に伴う調査(S56-2)が市教委により実施され、古墳時代～中世の遺物包含層が確認された。その後当研究会が、校舎改築や体育館・プール築造等に伴う第1～3・7・24次調査を実施しており、古墳時代初頭～前期・後期、飛鳥～奈良時代の集落遺構、中世の生産関連遺構等を確認している。さらに東側の第8次調査では、奈良時代初頭の遺物が大量に投棄された溝を検出している。



第1図 調査地位図



1・2区調査地(東から)



1区北壁



1区下層機械掘削(東から)



1区北壁下部



2区機械掘削(東から)



2区北壁



2区全景(東から)



2区北壁下部

図版 2



3区調査地(東から)



3区全景(東から)



3区北壁



3区北壁下部



4区調査地(北から)



4区全景(南から)



4区北壁



4区北壁下部



5区西壁



5区西壁下部



5区全景(北から)



5区掘削状況(北から)



6区調査地(西から)



6区機械掘削(南から)



6区西壁



6区全景(西から)

XII 神宮寺遺跡第2次調査 (ZG2013-2)

1. はじめに

神宮寺遺跡は、八尾市南東部に位置する弥生時代～中世の複合遺跡である。現在の行政区画では神宮寺3～5丁目にあたり、東西約0.7km、南北約0.3kmがその範囲とされている。地理的には生駒山地西麓に形成された扇状地から低地部にかけて広がっており、周辺では北側に恩智遺跡、東側に高安古墳群が位置する他、南側の柏原市域においては弥生時代以降の集落遺跡である山ノ井遺跡や奈良時代の大県郡条里遺構が隣接し、西側には玉串川の氾濫原が広がっている。また遺跡範囲の中央付近を東高野街道が縱断している。

今回の調査地の東約300mで実施した第1次調査(ZG93-1)では、弥生時代中期～室町時代の遺構・遺物が多く検出されており、弥生時代中期の土器棺墓からなる墓域の確認や、室町時代の石組井戸は特筆される。またその南西部の府教委1994では、弥生時代後期、古墳時代中期、奈良・平安時代の遺構・遺物が検出されている。両調査地は東高野街道沿いに位置しており、この付近では遺構確認調査等においても弥生時代～古墳時代の遺構・遺物が確認されているが、遺跡西方では河川堆積等を検出するにとどまっており、遺跡の実態は不明な点が多い。



第1図 調査地位置図

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の調査は八尾市神宮寺3丁目地内で実施された下水道工事(25-37工区)に伴う調査で、当調査研究会が神宮寺遺跡内で行った第2次調査(ZG2013-2)である。

調査地は、大阪府立八尾翠翔高等学校北側の東西道路上に位置する人孔部分2箇所(西から1・2区)で、調査面積は約8m²である。

調査は工事掘削深度である現地表(約T.P.+13.2m)下2.6~3.1mまで機械・人力掘削併用で実施した。調査では、調査地に点在する工事使用の仮ベンチマークを標高の基準とした。



第2図 調査区位置図

2) 基本層序

1区

0層は盛土・搅乱。1層は旧耕土、2層も搅拌された作土である。3層はシルト～細粒砂からなる水成層である。4～9層は粘土基調で炭酸鉄を含む湿地性の水成層である。

2区

0層は盛土・搅乱。1層は旧耕土である。2層はシルト～細粒砂からなる水成層で、1区3層に相当する。3～8層は粘土基調で炭酸鉄を含む湿地性の水成層で、1区4～9層に相当するが、砂粒の含有が認められる。

3) 検出遺構と出土遺物

遺構・遺物は認められなかった。



1区調査地(西から)



1区機械掘削(北東から)



1区北壁上部



1区北壁下部



1区調査状況(南東から)



2区調査地(北東から)



2区東壁上部



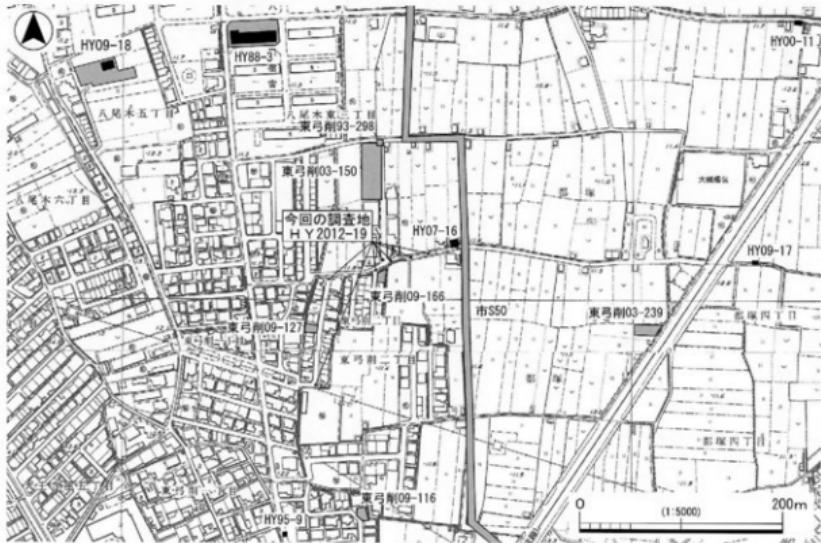
2区東壁下部

XIII 東弓削遺跡第19次調査 (H Y2012-19)

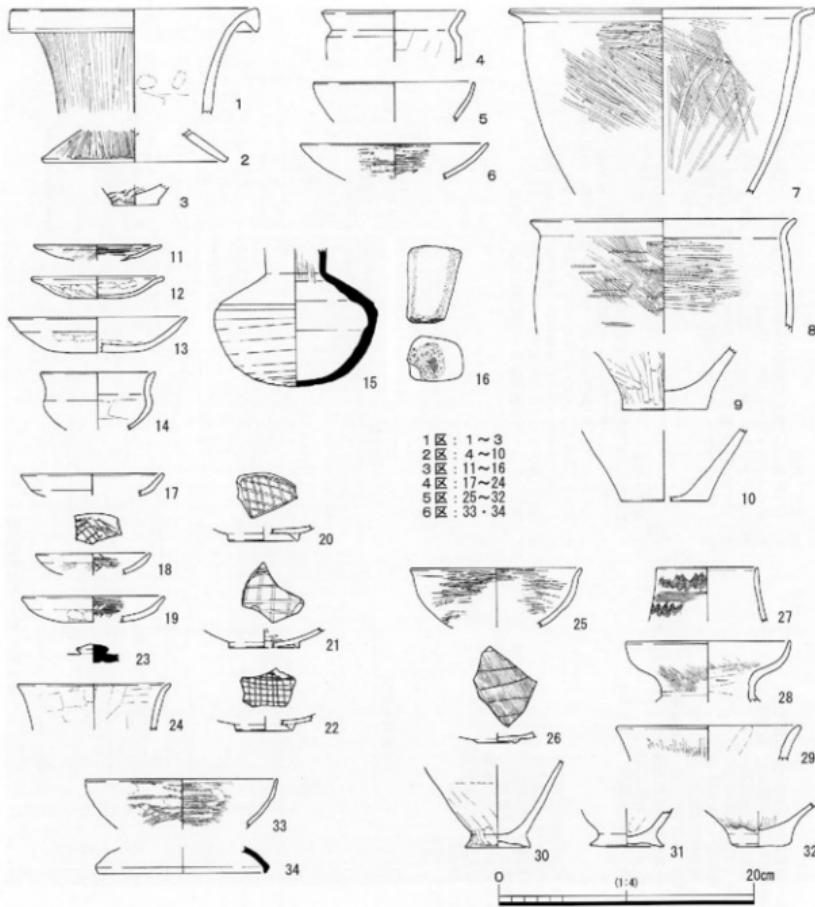
1. はじめに

東弓削遺跡は八尾市南東部に位置し、現在の行政区画では八尾木、八尾木1～5丁目、八尾木東1～3丁目、東弓削、東弓削2・3丁目、都塚、都塚1～4丁目、刑部にあたる、東西約1.3km、南北約1.2kmがその範囲とされている。当遺跡は、河内平野を北～北西へ流下していた旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川が分岐する「二俣」地区北側の沖積地上に立地しており、この沖積地上には隣接する中田遺跡をはじめ、矢作・小阪合・成法寺遺跡など多くの遺跡が連なって展開している。この他、東側では玉串川を挟んで対岸に恩智遺跡・神宮寺遺跡、長瀬川を挟んで南側では弓削遺跡、西側では志紀遺跡・田井中遺跡・老原遺跡が位置している。また、当遺跡一帯は『続日本紀』にある「由義宮」・「西京」の推定地にあたり、遺跡南部にはその中核をなした弓削寺跡が存在したとされる。

当遺跡は、昭和42(1967)年実施の国道170号(大阪外環状線)敷設工事の際、綠釉陶器等の土器類と瓦類が多量に出土したことから認識された。発掘調査としては昭和50(1975)年に、今回の調査地東側に位置する道路部分において、送水管布設工事に伴う南北1kmに及ぶ調査(市S50)が市教委により実施された。調査では弥生時代中期～中世に亘る遺構・遺物が確認され、古墳の存在を想定させる形象・円筒埴輪の出土や、「由義宮」・「西京」等に関連する可能性がある瓦や碟敷の検出は特筆される。その後も下水道工事に伴う調査や遺構確認調査といった小規模な調査が継続的に実施されており、当遺跡は弥生時代中期～中世の複合遺跡であることが確認されている。



第1図 調査地位図



第5図 出土遺物

5区

0層は盛土・搅乱。1層は旧耕土である。2層は搅拌された作土である。3層は河川堆積で、NR 1に相当し、摩耗した土師器・須恵器が出土した。4~6層は土壤化層で、出土遺物から概ね4・5層が古墳時代前期~中世、6層が弥生時代後期の遺物包含層である。7層は湿地性の水成層である。8層はFe斑を含み土壤化層と考えられる。

遺物は4・5層出土の瓦器挽(25・26)、6層出土の弥生土器(27~32)を図化した。25は内外面に密にヘラミガキを施すもので、12世紀中頃までに比定される。26は見込みに粗い平行線状暗文



1区調査地(南から)



1区北壁



1区北壁下部



2区調査地(北から)



2区東壁



2区東壁下部



3区機械撤削(南から)



3区第1面(西から)



3区上部東壁



3区下層機械掘削(南から)



3区下部北壁



4区機械掘削(北東から)



4区西壁



4区西壁下部



東部調査地(東から)



5区西壁



5区北壁下部



5区北壁 7層土器出土状況



6区調査地(西から)



6区南壁



6区南壁下部



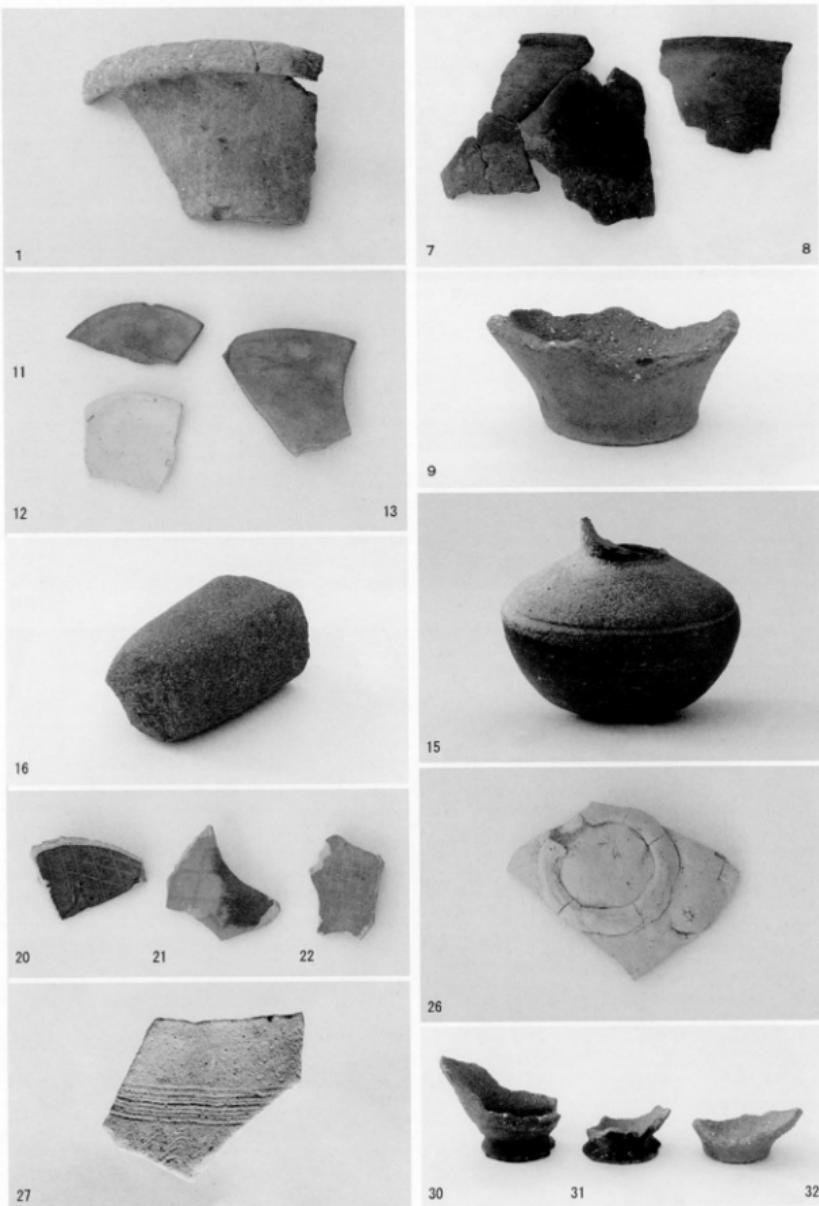
7区全景(東から)



7区南壁



7区南壁下部



XIV 水越遺跡第12次調査 (MK2012-12)

1. はじめに

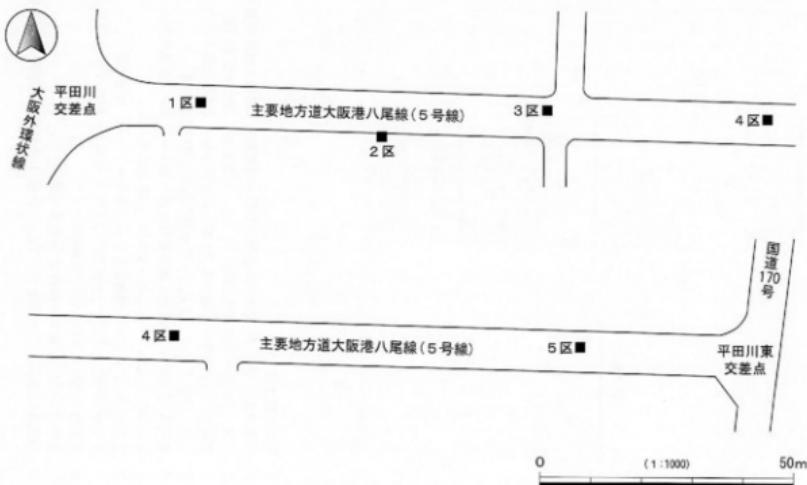
大阪府の東部に所在する八尾市は、東を生駒山地、西を上町台地、南を羽曳野丘陵、北を淀川によって区画された河内平野の南東部を占める。今回報告する水越遺跡は、本市東部の生駒山地西麓部に発達した緩扁状地上(標高12~55m)に立地する。現在の行政区画では、西高安町1丁目、水越2・5・7丁目、千塚1~3丁目、服部川1~7丁目、神立1丁目、及び千塚、大窪、山畠、服部川一帯の東西約1.25km、南北約1.2kmがその範囲と推定されている。

本遺跡を含む生駒山地西麓部には、多く遺跡が分布する。北には、弥生時代後期初頭の鋳造鉄劍や古墳時代前期の瑪瑙製鏡形石製品が出土した大竹西遺跡をはじめ、大竹遺跡、太田川遺跡など縄文時代以降の複合遺跡が展開するほか、古墳時代中期前半に造営された中河内地域最大の前方後円墳である心合寺山古墳(墳丘長160m以上)や、中期後半に比定される鏡塚古墳(径約28mの円墳または前方後円墳と推定される)が知られる。東の生駒山地西麓に発達した尾根上には、古墳時代後期以降に築造された高安古墳群(180基以上)が群集している。南には、高安古墳群にさきがけて横穴式石室を採用し、盟主的な役割を担ったことが推測される郡川西塚古墳・郡川東塚古墳が、南北を貫く東高野街道を挟んで東西に対峙している。時代が下ると、本遺跡の南端付近に郡川廃寺(高麗寺跡:奈良時代前期~鎌倉時代)の建立が推測されるが、詳細は分かっていない。

本遺跡は、大正9(1920)年、清原得嚴氏によって石鎚が採取されたことに端を発する。その後、昭和5(1930)年には、勾玉研磨用の筋砥石をはじめ、滑石製小玉や管玉の未完成品といった石製



第1図 調査地周辺図



第2図 調査区位置図

る。9・10層は3区確認の河川堆積層(9層:T.P.+10.0m 10層:T.P.+9.8m)である。11層は1区確認の河川堆積層(T.P.+9.3m以下)である。

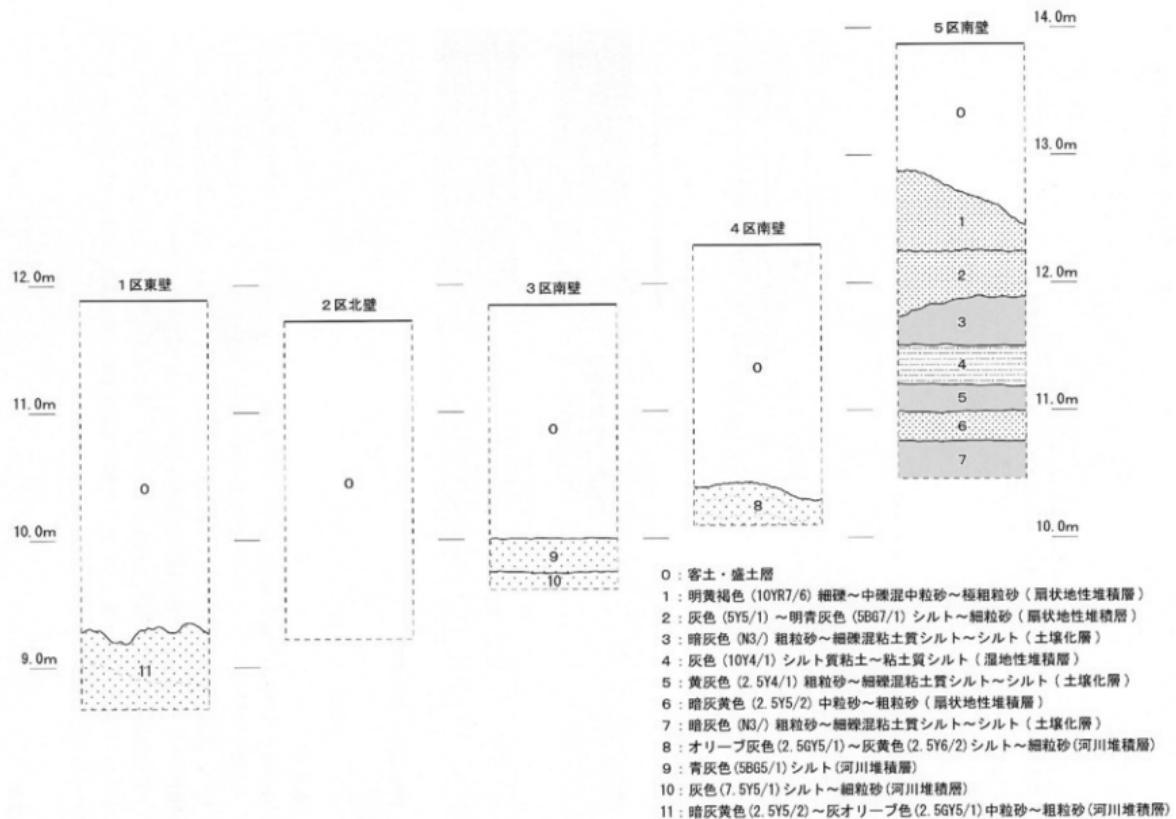
3) 検出遺構と出土遺物 なし。

3.まとめ

今回の調査地の南約70mの地点では第5次調査(MK95-5)が行われ、弥生時代後期～近世の遺構・遺物が検出された。この内古墳時代初頭～前期については、T.P.+9.2～10.5mで検出されており、居住域と墓域が近接して形成される様相を明らかにした。今回の調査における5区5層土壤化層は、レベル的に当該期に対応する地層の可能性が高い。本層内には遺物が混在せず、この上位の地層にも遺物が認められないことから、第5次調査で検出された遺構群が本地にまでは広がらない可能性が高くなつた。第5次調査で確認された当該期の集落の北限を考える上で特筆すべき成果と言えよう。

参考文献

- 坪田真一-2006「II 水越遺跡(第5次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告92』財団法人八尾市文化財調査研究会

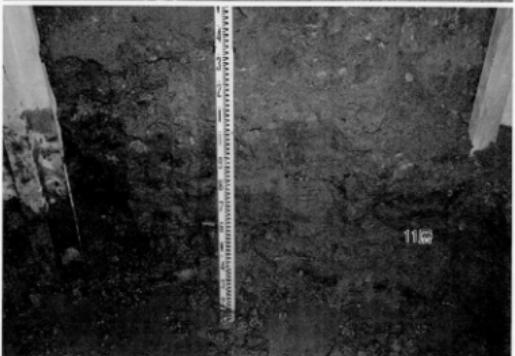


第3図 断面図 (S = 縦 : 1/40 横 : 1/80)

調査地周辺状況(北西から)



1区東壁(西から)

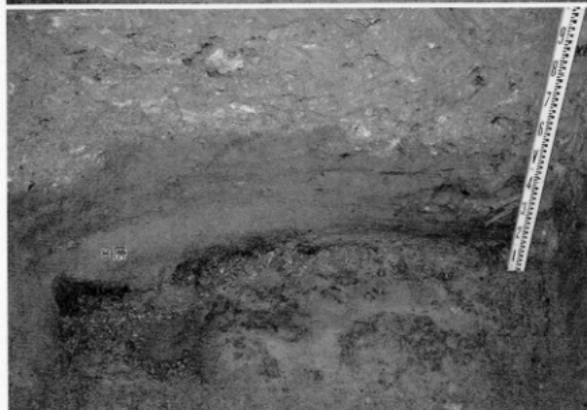


2区東壁(西から)





3区南壁(北から)



4区南壁(北から)



5区南壁(北から)

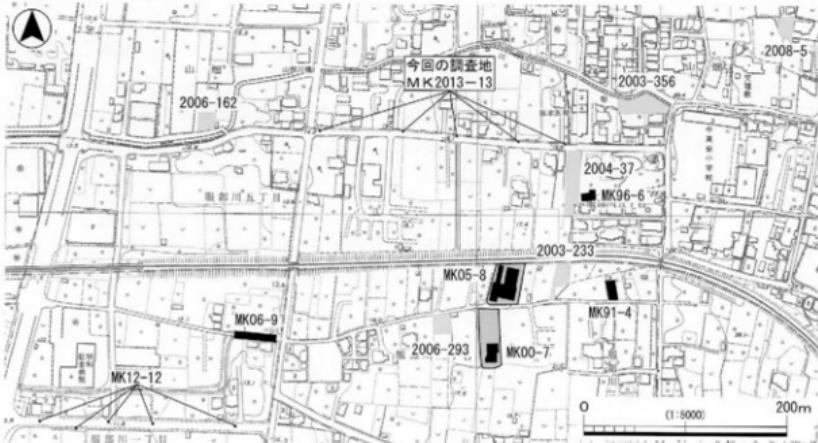
XV 水越遺跡第13次調査 (MK2013-13)

1.はじめに

水越遺跡は八尾市の北東部に位置し、現在の行政区画では西高安町1丁目、水越2・5・7丁目、千塚1～3丁目、服部川1～7丁目、神立1丁目、及び千塚、大窪、山畠、服部川一帯の約1.2km四方がその範囲とされている。地形的には生駒山西麓から河内平野に続く扇状地上に立地し、西側には旧大和川の主流であった玉串川・恩智川の氾濫原が広がっている。当遺跡は北側で太田川遺跡・大竹遺跡、南側で郡川遺跡・高麗寺跡に接しており、東側には高安古墳群・高安千塚古墳群が広がっている。

当遺跡では大正9年に清原得巖氏により石器が採集されて以来、縄文時代の石器や弥生～古墳時代の土器・玉作関係資料が多く採集され、「高安遺跡」・「千塚遺跡」等の名称で遺跡の存在が知られていた。そして昭和53年に最初の発掘調査として、大阪府教育委員会によって大阪府立清友高等学校建設に伴う調査(S53府教委)が実施された。調査では既知の採集資料と同様の成果が得られた他、弥生時代～古墳時代の集落構造(戸井・溝・方形周溝墓・方墳・土器棺等)、中世の集落構造(掘立柱建物・戸井等)が検出された。その後、八尾市教育委員会・当調査研究会により多次に亘る発掘調査が行われており、これらの調査成果から、当遺跡は縄文時代中期～近世の複合遺跡であることが認識されている。

今回の調査地は遺跡範囲中心に近く、周辺では南東部で研究会第4・6・7・8次調査を実施している。これらの調査では弥生時代後期を中心とした遺構・遺物が検出され、この一帯が該期の集落域であったことが確認されている。さらに第7次調査では縄文時代晩期の土器埋納ピットの可能性がある遺構の他、平安時代では土坑や地鎮祭祀を示唆するような土器埋納ピットが検出されており特筆される。



第1図 調査地位置図

2. 調査概要

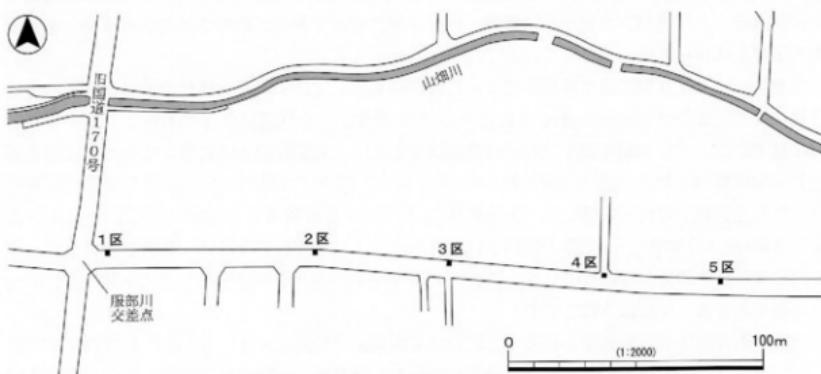
1) 調査の方法と経過

今回の調査は八尾市服部川5丁目地内で実施した下水道工事(24-16工区)に伴う調査で、当調査研究会が水越遺跡内で行った第13次調査(MK2013-13)である。

調査地は人孔部分5箇所(約2.0×2.0m:西から1~5区)で、総面積は約20m²を測る。

調査は現地表(T.P. + 14.3~19.1m)下2.5~2.9mについて、機械・人力掘削併用で実施した。

調査では点在する工事使用のベンチマークを標高の基準とした。



第2図 調査区位置図

2) 基本層序と出土遺物

1区

現地表面の標高はT.P. + 14.3mである。0~6層の堆積層を確認したが、既設水道工事により1~5層は壊されており、本来の堆積層は北西隅の一画だけに残っていた。

0層は盛土。1・2層は河川堆積層。3層は弥生時代後期~古墳時代初頭の遺物包含層で、土器片が少量出土した。4~6層は湿地性堆積である。4層上面で調査を行ったが、遺構の検出はなかった。

2区

南半分はガス工事により搅乱されており、本来の堆積層は北半部に残っていた。

0層は盛土。1層は旧耕土。2層は河川堆積層。3層は湿地性堆積層。4層は河川堆積層である。

3区

南半分はガス工事により搅乱されており、本来の堆積層は北半部に残っていた。

0層は盛土。1・2層は河川堆積層である。

4区

0層は盛土・搅乱。1層は作土の可能性がある。2層以下は一連の水成層と考えられる扇状地





3区北壁



4区機械掘削(北から)



4区全景(東から)



4区北壁



5区調査地(西から)



5区全景(西から)



5区東壁



5区調査状況(北東から)

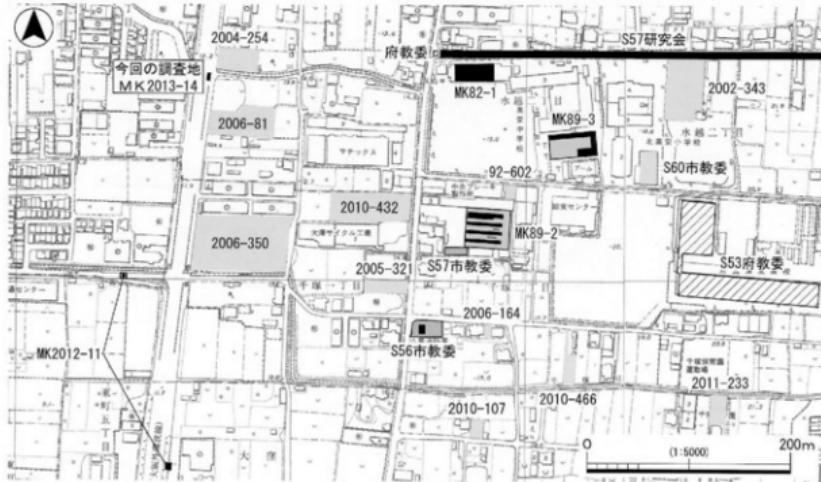
XVI 水越遺跡第14次調査 (MK2013-14)

1. はじめに

水越遺跡は八尾市の北東部に位置し、現在の行政区画では西高安町1丁目、水越2・5・7丁目、千塚1~3丁目、服部川1~7丁目、神立1丁目、及び千塚、大窪、山畑、服部川一帯の約1.2km四方がその範囲とされている。地形的には生駒山西麓から河内平野に続く扇状地上に立地し、西側には旧大和川の主流であった玉串川、恩智川の氾濫原が広がっている。当遺跡は北側で太田川遺跡・大竹遺跡、南側で郡川遺跡・高麗寺跡に接しており、東側には高安古墳群・高安千塚古墳群が広がっている。

当遺跡では大正9年に清原得巖氏により石鎚が採集されて以来、縄文時代の石器や弥生~古墳時代の土器・玉作関係資料が多く採集され、「高安遺跡」・「千塚遺跡」等の名称で遺跡の存在が知られていた。そして昭和53年に最初の発掘調査として、大阪府教育委員会によって大阪府立清友高等学校建設に伴う調査(S53府教委)が実施された。調査では既知の採集資料と同様の成果が得られた他、弥生時代~古墳時代の集落遺構(井戸・溝・方形周溝墓・方墳・土器棺等)、中世の集落遺構(掘立柱建物・井戸等)が検出された。その後、八尾市教育委員会・当調査研究会により多次に亘る発掘調査が行われており、これらの調査成果から、当遺跡は縄文時代中期~近世の複合遺跡であることが認識されている。特筆すべき成果として、遺跡範囲北部に当たる研究会第2次調査(MK89-2)では、南北方向に伸びる弥生時代中期の大溝の存在から環濠集落が推定されている。

今回の調査地は遺跡北西角部に当たる。周辺では小規模な遺構確認調査等が実施されており、南東部の(2006-81)では、中世~近世の生産関連遺構や、古墳時代初頭頃の河川や遺物包含層を確認している。



第1図 調査位置図

2. 調査概要

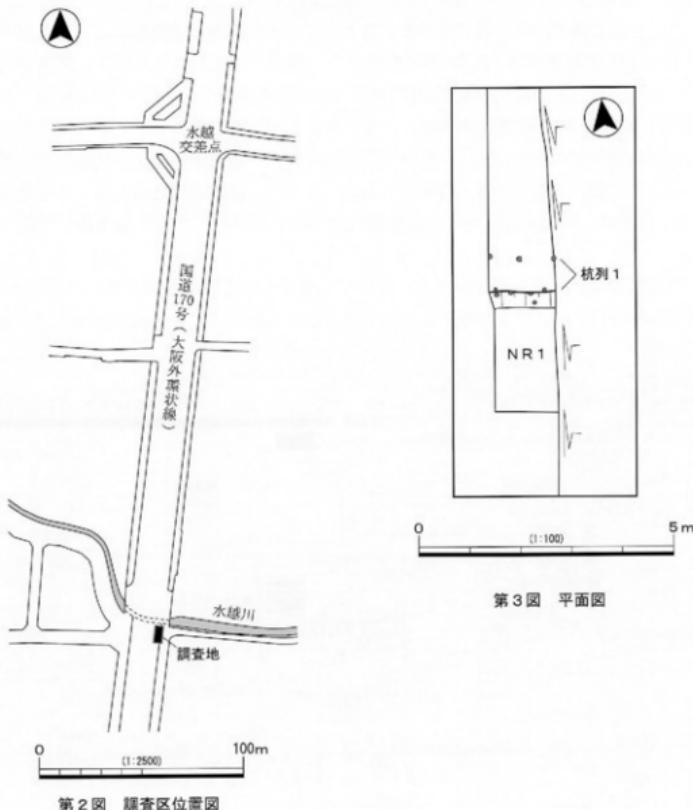
1) 調査の方法と経過

今回の調査は八尾市水越1丁目地内で実施した下水道工事(24-9工区)に伴う調査で、当調査研究会が水越遺跡内で行った第14次調査(MK2013-14)である。

調査区は国道170号(大阪外環状線)上に設定された立坑部分(南北8.0m×東西3.6m)1ヵ所で、面積は約29nfを測る。

調査は現地表(T.P. +13.5m)下約2.0~4.0mについて、機械・人力掘削併用で実施した。また以下の約2.2mについては下層確認調査を実施した。なお調査区内東半部には、道路に沿った擁壁の基礎杭(CCP杭)が並んでおり、これが調査範囲以下に及んでいたため、この部分については機械掘削とした。調査はすべて夜間調査である。

調査で使用した標高の基準は工事図面記載の「G L = T.P. +13.51m」である。





調査地(北東から)



杭列1(南から)



NR1(東から)



NR1西壁



西壁北半



調査状況(南西から)



下層南壁



下層機械掘削状況(南西から)

XII 水越遺跡第15次調査 (MK2013-15)

1. はじめに

水越遺跡は八尾市の北東部に位置し、現在の行政区画では西高安町1丁目、水越2・5・7丁目、千塚1~3丁目、服部川1~7丁目、神立1丁目、及び千塚、大窪、山畠、服部川一帯の約1.2km四方がその範囲とされている。地形的には生駒山西麓から河内平野に続く扇状地上に立地し、西側には旧大和川の主流であった玉串川・恩智川の氾濫原が広がっている。当遺跡は北側で太田川遺跡・大竹遺跡、南側で郡川遺跡・高麗寺跡に接しており、東側には高安古墳群・高安千塚古墳群が広がっている。

当遺跡では大正9年に清原得巖氏により石鏃が採集されて以来、縄文時代の石器や弥生~古墳時代の土器・玉作関係資料が多く採集され、「高安遺跡」・「千塚遺跡」等の名称で遺跡の存在が知られていた。そして昭和53年に最初の発掘調査として、大阪府教育委員会によって大阪府立清友高等学校建設に伴う調査(S53府教委)が実施された。調査では既知の採集資料と同様の成果が得られた他、弥生時代~古墳時代の集落遺構(井戸・溝・方形周溝墓・方墳・土器棺等)、中世の集落遺構(掘立柱建物・井戸等)が検出された。その後、八尾市教育委員会・当調査研究会により多次に亘る発掘調査が行われており、これらの調査成果から、当遺跡は縄文時代中期~近世の複合遺跡であることが認識されている。

今回の調査地は遺跡範囲西端にあたる。周辺では北部で第11次調査(MK2012-11)を実施しており、2区の調査では弥生時代中期・後期の遺構・遺物を検出した他、下層からは縄文土器も出土しており注目される。



第1図 調査位置図

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の調査は八尾市山畠地内で実施した下水道工事(24-203工区)に伴う調査で、当調査研究会が水越遺跡内で行った第15次調査(MK2013-15)である。

調査地は八尾市東部を南北に継断する国道170号(大阪外環状線)東側に設定された立坑部分1箇所(東西8.0m×南北4.4m)で、総面積は約36m²を測る。

調査は現地表(約T.P. + 12.9m)下約6.0mについて、機械・人力掘削併用で実施した。なお調査区西半部には既設NTTケーブルが南北に継断しており、約GL-3.0mまでは搅乱されていた。

調査では工事使用のベンチマーク(KBM. 2 : T.P. + 12.725m)を標高の基準とした。

2) 基本層序

調査区中央の西壁断面を基本層序としたが、下層部については調査区東壁断面を合成した。

0層は盛土・搅乱である。1層は旧耕土である。2・3層も作土で、2層は搅拌され、3層はブロック状を呈する。4・5層は流水性の水成層で、4層は土壤化が認められる。6層は土壤化層で、作土の可能性もある。7層以下は扇状地性堆積である。7・8層は流水性の水成層である。9~12層は湿地性の水成層である。9層は土壤化が認められる。13~15層は洪水砂による一連の堆積であろう。16層は静水性の水成層である。17~20層は湿地性の水成層で、19層は上部がやや土壤化する。21層は洪水砂と考えられる。22・23層は湿地性の水成層である。

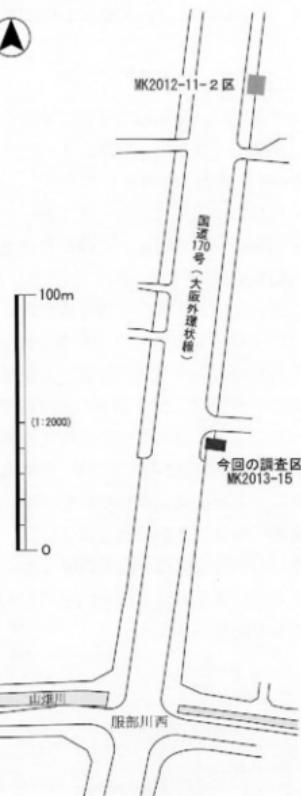
3) 検出遺構と出土遺物

遺構は認められなかった。遺物は6層から時期不明の土師器片が少量出土した。

3.まとめ

今回の調査では遺構は認められず、近世頃の耕作土と、それ以下では洪水堆積や湿地性堆積といった水成層を確認した。遺物も時期不明の土師器片が少量出土したのみであった。出土遺物量はコンテナ1箱を数える。

北約140mで実施した第11次調査2区では、近世の耕作面とほぼ同一面で弥生時代中期・後期の遺構・遺物を検出した他、下層からは縄文土器も出土している。当地においては、近世耕作面のレベルはほぼ同じであり、また作土と考えられる6層から土師器片が出土していることから、弥生時代の遺構面は削平されている可能性があるが、詳細は不明である。



第2図 調査区位置図



調査地(西から)



人力掘削状況(南東から)



6層上面(東から)



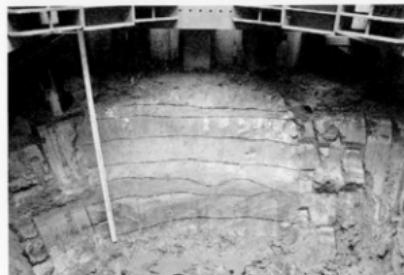
9層上面(東から)



東壁(0~11層)



東壁(10~15層)



西壁(16~23層)



断面実測状況(東から)

